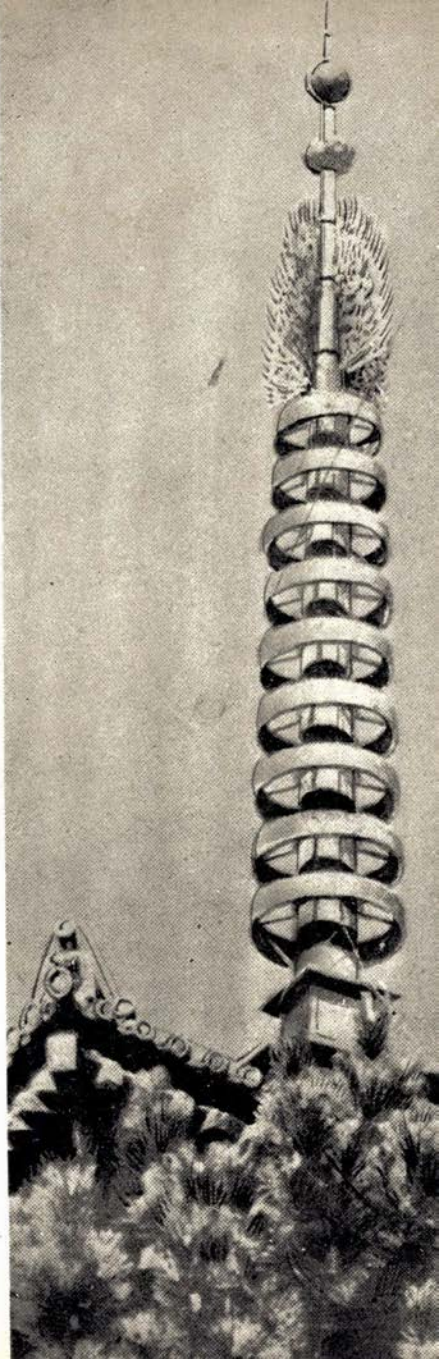


民族復興の根柢を培うもの

— 国民文化研究会 岡山合宿記録 —

表紙 薬師寺東塔の相輪

薬師寺は聖徳太子薨後約百年、天平二年の造営といわれる。東塔のもつ階調の華麗、律動の優美は、相輪部特にその上方に渺茫たる余韻をもつて輝く「水煙」の獨創性とまづ、塔婆中の白眉といわれる。或人はこれを「凍れる音楽」と形容してその沈黙の律動感にこたえたが、このような、凍るばかりの気品を現代日本の文化に見出すことはできない。私達はこの塔を創造した時代の精神的モチーフに畏敬せずにはおられない。現代に建立すべきかくも格調高い塔とは何か。新ルネッサンスを待望する声は野にはかれて久しい。しかしそれが現実には開花しないのは何故か。国民文化研究会とこの合宿は、それに応える何ものであることはたしかである。





合宿参加者全員 一岡山県護国神社にて一

第二行進曲

田所広泰遺作

野にふしぬ われら
山ゆきぬ きぞ もろともに
あゝ人生の戦！

同情は苦しみ 共感は悲哀
全人類の思想と感情の嵐の中

身をさらしてぞ進みしを—

見よ われらが歓喜の振舞

苦痛のさ中にあふるゝを

かくてわれらはわれらの

性格を形成す

吹くよ 朝風

きらめくよ日は押し立つ旗に

吹きならせ いま

第二行進曲を！

(昭和十二年)



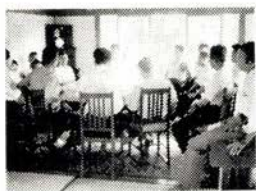
班別討論（第一班）



朝の体操



コンバ（第二日）



班別討論（第二班）



班別討論（第三班）

岡山合宿に歌う

作詞 富岡家八郎
作曲 名越二虎之助

ひそみしおもいじゆうよねん
くるしきたづきたどりーつ
みちもとめたもけんさんの
みのりーいたきていよここに

岡山合宿に歌う

一

ひそみしおもい

十余年

くるしきたづき

たどりつゝ

道もとめたる

研鑽の

みのりいだきて

今ここに

二

つどいし友ら

たゝなづく

青垣山に

抱かれし

護国の森に

むすばれん

奇しきえにしを

誰かしる

三

み魂しづまる

森内に

友とかたれば

うつそみの

いのちとともに

おたげびし

かなしうたごえ

今うつゝ

四

あゝいにしえの

神話曲

われらが胸に

再びも

たかなる軍楽

雄壮の

歴史の勝利を

うたうかな

五

不死鳥死して

幼鳥は

焼土のなかを

はるかにも

大和国原

天がける

ふるきつたえは

今あらた

六

国まもりこし

み祖らの

魂魄生きて

うつゝにも

足音たかく

ひびくかな

戦列つくり

つつかんか

戦列つくり

つつかんか

目次

国民文化研究会の意図するもの	川井修治	1
岡山合宿に祈る		9
合宿記録		15
一、合宿挙行への意志		15
二、合宿経過報告		17
第一日 友らの邂逅		17
――失われたるものを求めて――		
午前 集合 班別編成		17
「開 会 挨拶」	川井修治	18
全員自己紹介		19

午後 「現代日本の盲点」……………名越二荒之助…20

「所謂、資本主義社会と社会主義社会について」…姫路西高校 石坂豊明…24

夜 「ソ連と中共を語る夕」……………28

1、パネル式座談会「共産社会に住んでみて」……………在ソ抑留有志…28

2、共産主義対策への私見……………岡大教授 木下彪…41

第二日 民族の指標を求めて……………51

―ニホンナショナリズム確立のために―

午前 「経済学の日本的思考」……………高崎経済大学教授 石村暢五郎…51

「古典のいのち」……………千葉第一高校 南波恕一…54

午後 「聖徳太子研究と現代」……………労働科学研究所 高木尚一…62

班 別 討 論……………66

夜「日本教職員組合は現状から脱却すべし」……………共同通信社 浜田收二郎…66

「人間性に立脚する政治」……………小田村 寅二郎…72

第三日 新しい前進のために……………87

―内なる意志を統べるもの―

「分裂を統一に導くもの」……………南波 恕一…87

和歌による創作叢修……………88

全員感想発表……………90

創作発表……………90

閉会挨拶……………96

国歌斎唱……………98

散会……………99

三、合宿感想集……

(装幀 妹尾大之祐)

はしがきに代えて

— 国民文化研究会の意図するもの —

川 井 修 治

去る八月二十四日より三日間、私達は岡山市奥市護国神社合宿所に於いて、中国近畿学生・青年合宿研修会を挙行いたしました。今ここにその合宿記録を刊行するに当り、私達がこの会を始めました趣意、合宿の持つ意義、将来に対する私達の念願と展望等について聊か思う所を申し述べ、参加者諸兄の志を励ますと共に、江湖の御支援に対してお答えいたしたいと思ひます。

私達の念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興であります。これこそは、過ぐる日の敗戦に悲涙を呑んだすべての国民同胞の共通の願ひであり、祖先とそして又子孫に対して我々が負うている至上の課題と云うべきであります。それがためには、凡ゆる政策の立案や制度の改廃の大前提として、何よりも先ず現前する国民思想の

分裂と頹廢を克服し、緊密なる国民共同体の精神的基盤を形成しなくてはなりません。そして就中次代を背負う青年・学生層の中に、祖国の伝統に対する素直な情感を喚び起し、精確なる学問と健全な良識を身につけさせ、自分の持てる力を国家国民生活の正しい建設のために捧げようとする氣風を自らの内発的自覚の上に振り起させることが肝要であります。このことがなされないならば、いかに物質生活が整い知識のレベルが高まったとしても、嘗つての大ローマが正に経済的致富と文化的爛熟のさ中に枯死した如く、民族本然の若々しい生命力は根元を断ち切れ、やがては内的崩壊の途を辿ることは必至であります。

このような民族復興の根柢を培う仕事は、今の日本にとって焦眉の急を要するものであることは、誰しもが知る如くであります。敢えて岸首相の演説を引き合いに出すまでもなく、国民の道義の確立を願ひ、青年の愛国心の喚起を要望する声は、巷に満ち満ちていると云つても過言ではありません。しかるにそのために實際なされていることと云えば、学校制度をいじつたり奨学金を増したり、スポーツやレクリエーションに力瘤を入れたり、或いは又既成の青年団体や社会教育機関の活動を促進するといった風な余りにも外面的な事柄に止まっている感じが覆うべくも

ない現状であります。勿論、私達はこうした外面的施策が全然無意味であるなどとは思いません。しかしながら、もっと根本的な事柄、即ち直接に若い青年達の心魂に喰い入って、これを内奥から揺り動かすという心と心の接触が行われるのでなければ、云う所の道義も愛国心も上滑りに流れ、所詮は単なる掛声や政治的身振りに終わってしまふことを危懼せざるを得ないのであります。蓋し、意志は意志によってのみ喚び起され、精神の改革は精神によってのみ達成され得るからであります。

とは云え、この民族復興の根柢を培う仕事が極めて困難なものであることは、今更贅言を要しません。今の青年達には日本の伝統と云えば、封建的遺制とか軍国主義とかいう概念しか頭に浮かんで来ないのが実情であります。民主々義を合言葉のように振り廻すことは知っているけれども、その内実は一向に消化されておらず、つきつめた所は我見の固執、得手勝手な権利の主張以外の何物でもありません。高貴な精神や深奥な教えによって身を律することを束縛として放下し、露骨な官能的、唯物的自我の野放図な発散しか考えない、といったタイプが一般のようであります。このように自己自身の在り方に対する謙虚な省察と慎思とを欠く処から、凡ゆる社会事象

に對し、自分をその場に投入して考えようとせず、単に外在的、傍觀的に眺めるといふ人文・社会系統の學問にとつて致命的な研究方法上の誤謬が生じて參ります。資本主義とか社会主義とかいふ抽象概念を操作することにのみ熱中して、自分が本質的に日本國民として生を享けているといふ事實認識がこれに伴わないのであります。こうした論理のつぎはぎが學問である、と日々教えられてゐる青年達が畢竟國民生活を厭離し呪咀し、果てはこれを破壊し否定することによつて人間の幸福が齎らされるといふ考え方に靡いて行くのは、蓋し必然の徑路であります。こういう青年達と相對して道を説くことが殆んど不可能事のように思われるのも、あながち無理からぬ處であります。

しかし私達は自分自身の経験から、それが可能であることを確信しております。日本の青年達が上記のような混迷に陥つてゐるのは、決して青年自体の罪ではありません。その責を主として負ふべきものは、現代日本の表面を覆つてゐる浮薄乱脈極まる思潮、特に現今ジャーナリズムを支配してゐる所謂進歩主義者達であります。彼等こそは片々たる空理に捉われて嚴肅な現實精神を忘却し、意識的、無意識的に赤色革命の温床を育くみつつある現代のソフィストであります。そ

れ故、一度学問研究方法を根柢から正し、色眼鏡を脱したデータを取りそろえて、かかる進歩主義者の冗舌に侵された汚毒の表皮を切開するならば、その下には若き民族の清純な血脈が力強く搏動していることが知られるのであります。過去幾度かの、そして又この度の合宿研修会に於いて、私達が確認したのは正しくこの事実でありました。私達を鼓舞し前途の光明を感じさせてくれているものは、かかる民族の血脈がなべての青年達の心に底流として潜みつつも不断に流れていること、而も昨今の騒然たる内外の状況に鑑みて、それが今や鬱然たる胎動期を迎えつつある、という実感に他なりません。問題はだから、今こそかかる底流を明確な意識の上に浮びあがらせ、学問的体系を整え運動の組織を固め、自らの力を信じて奮い立つことでもあります。これができるならば、最近特に世人の指弾を受けつつある全学連や総評等の動きは、その土台を一角より掘り崩されて、必ずや自壊に至ると信ずるものであります。

この度の合宿研修会も、もとよりこのような基本的意図を秘めつつ行われたものであります。その経過については別稿で詳細に触れられる筈であります。特にこの種の試みが行われたことのない岡山に於いては、特筆すべき意義を持ったと私達は固く信じております。勿論、参加者の

殆んどは初めて顔を合わせた者同士であり、僅か三日という短時日の間では解き尽せぬ問題も幾分残されたかと思うのでありますが、ともかく生き方の根本的態度として、我々が一つの共通の運命の下に生きていくという事実、国民共同体という連帯の中で思索し行動して行かねばならぬという実感、これだけは参加者全員の胸裡に強く刻印されたのであります。そしてそのような生き方の支えになるものは、奥深い自国の文化に対する確信でこそなければならぬこと、即ち心なき敗戦の申し子共によって泥土に委し去られた日本文化の伝統の精髓を今こそ恢宏し、現代の諸課題に対処する原理として光あらしめねばならぬ、ということが最終の結論として語り交されたのであります。この日本文化の性格や系譜については、各講師より夫々の角度からする説明が行われ、参加者の真剣な討論に附されたのであります。特に聖徳太子の「自他の二境を等しうして群生と苦楽を偕にす」という汎人間的同信同胞生活の極致とも云うべき遺教が等しく全員の心を打ったことを附言して置きたいと思ふのであります。

云うまでもなく合宿は、それ自体をもって完結するものではありません。それは云わば参加者諸君が学校や職場に帰って夫々の課題に直面する場合のための一つのきつかけをなすものに過ぎ

ず、その意味では爾後の生活との連関に於いてその意義を全うするものと云えるでありましょう。しかも我々をめぐる四囲の状況は依然として混沌の相を脱しやらず、仔細に観察すれば破局の危機をすらはらみつであるかに推察せられます。我々の一人一人に、夫々の国民的責務を確実に果し、そうすることによって祖国の命脈を防護せんとする決然たる意志が、今日程切実に要求されている時代はないのであります。このような時にこそ我々が合宿で得た体験とつながりは、何物にも替え難き力の源泉として重大な役割を果すものと確信いたします。

再び申しますが、この民族復興の根柢を培う仕事は、今日只今から手を着けられ、長い年月と不転の努力をもつてはじめて遂行し得る一大国民的事業であります。それは窮極目標に於いては遠大であります、甚だ速効的ならざる地味な仕事であります。それをなし得る当体は、断じてお役所仕事やマス・プロ的學校教育ではありません。況んや利を以って真を覆う利益団体や、眼中に政権しかない有様の政治団体ではあり得ないのであります。それは実に日本民族の進むべき道を求めて常住自己研鑽を怠らず、止み難い国民義務感より自らこの大業に献身せんとする人々の結合によってのみ遂行し得るものであります。私達は決して自らを高きに置く選良意識から

ではなく、寧ろ反対に地の塩としての謙抑な気持から、固い国民的連帯の結節を一人から一人へと拡大して行くことを念ずるものであります。それ故、我々の研究会は特定の政綱やイデオロギ―を持った団体ではなくて、文字通り自由なる結合体であります。志の根柢に於いてつながる者がそこに結集し、お互いに研鑽し協力して行く拠点であるに過ぎません。私達を背後に於いて支えるものは、いかなる社会的勢力でも学者的名声でもありません。私達を支えるものは、一国民として野に叫ぶ真心のみであり、この真心を受けとめてくれる共鳴共感の同信同胞世界のみであります。この思いあればこそ、今は微々たる存在にしか過ぎない私達の前途には、洋々たる未来のあることを敢えて声高く揚言するものであります。

岡山合宿に祈る

大和やまとは 国の まほろば たゞなづく

青垣山 隠こもれる 大和し うるわし

祖国を遠くはなれて、異郷に散った戦友達の心のスクリーンに写ったであろう故郷の山河。その光景をシンボライズしたのではないかと思われるこの護国の森。照りつける真夏の日射しにも、尚山肌のしめりを思わせる青い青い山々。

今この森に集い、この宮に額づいて、亡き人々の心を憶う時、期せずして青年日本武尊が、故里大和を遠く離れた戦陣に病臥し、疲労困憊「いたく疲れたり」と、日頃にもない言葉をはかれながら「能ぬほの煩野のに到りませる時に国しぬばして」詠まれた、冒頭の歌を想起せずにはおられない。

この森に鎮ります我等が父、我等が兄、我等が弟、そして我等が友の今わのきわに心に浮んだ

であろう母のいます故里——日本のイメージはこの尊の歌の中に端的に表現されているのではないかと思われるのである。

異郷に散った尊の魂魄は白千鳥となって大和国原さして天翔あまがけった、と古事記は歌っている。南の島々に、大陸の果にそして大海原に、大空に散華した私達の同胞の魂魄も、必ずや白千鳥となって母のいます故里——日本の青垣山さして飛び立ったことであろう。

昭和の動乱を今、この地に立つて偲ぶ時、奇しくも、日本神話の施律が、亡き人々の思いを、惻々と私達の胸によみがえらせてくれるのである。そこには、心にくい許りの故国への執着が謳われている。古事記の表現を借りることなくしては、敗戦より戦後に至るまでの昭和の動乱を想憶することは出来ないときえいわれる。母を恋い、故里を恋いつつ散って行ったであろう私達の同胞の、其の心の奥底には、必ずや、『祖国よ、とわに栄えよかし』という祈りと、天翔けりかえて再び国を守らんとする一念があったことであろう。

不死鳥は自ら焼死して、その中より幼鳥となって甦生するという。敗戦の日本は不死鳥となって甦らねばならない。このフェニックスの如き執着の力を失う時、民族は果て知れぬ衰運を辿る

事は、東西の歴史の教訓である。

私達をこの森、この青垣山に集わしめたものも、この執着、この執念ではなかったかと思うのである。ここに岡山合宿の経過を報告するにあたって、亡き人々の靈に敬虔なる祈りを捧げる次第である。

合宿記録

担当

富岡榮八郎
名越二荒之助

この記録に載せた講義は合宿終了後各講師から梗概を寄せて戴いてこちらでまとめたもので、最終的に講師の閲をうけていないことを附記しておく。特に木下講師の講義紹介は、当日の話を富岡が記憶をたどりながら短くまとめたので、講義の内容とニュアンスを充分に現し得てないことを危懼している。

序曲 青年の最後

故首藤雅也の書簡より

起きよ 前進せむ
集合する青年よ
その胸にわきくる
真紅の血潮よ！

見よ前途は広く
大海原の動乱を
天つみ空の青雲の
あゝその向伏すきわみまで
雄飛せむ友よ

八尋の鳥も

カラス
八呎鳥も

見よこの

大和島根にはばたいたのだ！

あゝ歴史生命よ

永却の流転こそ

日本のいのち

神州不滅の現証は

迷いゆく人の子の精神の

全展開信順意志だ

開けよ

今直ちに

鉄壁の城門を！

暁かけて目を覚せ

吹きならせ いま

第二行進曲の秘奥のリズムを！

力あらしめよ！

傷つきたはれし友のいのちも

いや もえて！

熱風こむる祈念のさ中

いま

神靈の突撃は

無窮のいのちを

無限のリズムに

作奏せむとす

動乱こそはいのちのしるし

破曲こそは人生の威敵

あゝ

ふれしめよ

天地の正気に

つきさるいのちの

消えざる胸に

再びいだく生の面影よ

相聞の辞世歌よ

(昭和十九年)

合宿挙行への意志

ささやかではあっても、六十名余の人々が一堂に会して、二泊、三日の合宿を営むということ
は、現在の社会環境に於ては、大変な事であった。幾多有志の方々の援助と激励なくしては、到
底出来うべくもない事である。しかし合宿を挙行せしめた諸要因の中で、私達の気持を貫いてい
たものは現代の時代への憂慮と日本の復興を正しい姿に於て実現せねばという使命感であった。そ
の当時我々の間にはどのような言葉が呼びかわされていたか、一会員の書簡を引用して合宿挙行
への決意を代表させることにする。

「中共の招待外交は既に応分の成果をあげ、国内各地では、その「真相」があらゆる形で、滲透していつて
をります。ソ連はソ連で世界青年平和友好祭に日本青年五百人を招待するという、大掛りな演出をもって臨
んできてをります。フルシチョフは「共産陣営には原水爆以上の強力なる、イデオロギーという兵器があ
る。」と豪語し、国費の存分を投入して、軍備競争に代る純粹の「思想戦略」とその戦術を着々と指向しつ
つあります。これに対して、日本政府はモスクワへの渡航制限にヤッキとなるだけで、何ら積極的対策をと

ろうとしてをりません。岸首相提案の東南アジア青年会議にしても、日本側には彼等に訴えるべき、何物もないという始末、日本のどこに「文化精神」が息づいているといえましょうか。この様な状態で推移するならば、日本は文化精神の空白のままに自滅するより外ありません。

日本を支えるものは、日米安保条約でもなければ、日米共同声明でもないことを知るべきであります。岡倉天心は、「内からの大勝利あるのみ、然らずんば外からの大敵に敗れむ」と喝破して、逞しい「大積極精神」の興隆を期待しました。之こそ明治以来日本に課せられた最重要の課題といわねばなりません。「世界文化単位」日本歴史の精神的遺産は、不滅の宝庫としてダイヤの如く輝いてをります。ダイヤモンドは磨かねば光りません。

私達はこの様な使命を思うて、モスコイ迄のただ一人の渡航費にも満たぬような費用で、岡山合宿を挙行せんとしております。ソロモンの栄華を誇る世界プロレタリア平和友好祭に比べて、余りにも皮肉な対照といわねばなりません。

嘗ての歴史がそうであったように、日本歴史の真の開花は、踏みにじられた「一本の百合」の中にしか期待できないのでしょうか、合宿の規模はささやかでも、精神は王者の風格をもって、伝承せらるべき歴史の遺産を、再確認したいと思うのです。

八月二十四日（土）小雨後晴

合宿第一日 友らの邂逅

|| 失われたるものを求めて ||

……環境のすばらしさに較べて、合宿を営む設備は不完全であったが、何とか努力して間に合わすことが出来た、二十三日より泊って、骨折って戴いた十人の方達も一息ついて、後は参加者のみえるのを待つばかりとなった。

昨夜来の雨も殆んどあがったらしい。各自思い思いに外に出て、朝の空気を吸う。森のあおさ。その爽かさ。眼にしみ心にしみる。

今日に至る迄惜しみなく援助の手をさしのべて下さった方々の事を更めて思い起す。朝の時間の過ぎるのは速かった。

午前八時。川井修治氏九州より夜行で到着する。ついで岩国よりK氏、Y氏来る。

九時。十時。三三五五来る。森の端に現れ長い参道をゆっくり何か語りながら。T氏、O氏、F氏。ついで又三三五五。次々と手続きを済まし参集所で休んで戴く。タクシー来る。K会社の方々。又来る。S会社の方達。とぎれては又森の端に現れる。紅一点交る。I氏。紅四点となる。オートバイ来る。M氏、続いて集る。

十一時。我々は受付を離れて参集所に入った。

そこに私達は、つい先刻まで会場の準備をしていた時とは、全く異った空気を感じた。岡山合宿は成立した。それは一つの喜びであった。集った人達の大半は二十四、五才から三十四、五才迄の人々である。十代が五、六人。四十代が三、四人。五十代二人。六十代一人。何時の間にか雨はすっかり止んで、青空が見えている。森はいよいよあおさを増して来た。

十一時半。集合合図の太鼓の音が森にこだまする。室内の静かな語らいは止み、一同起立、講壇を前にして、座をあらためる。参加者の視線は一せいに講壇に注がれた。

川井修治氏は、静かに力強く、大要左の如き開会の挨拶をのべた。

『私達はある機縁に結ばれて、この森に集りこれから二泊三日の生活を共にする事となりました。』

国民文化研究会は、ただ皆様に語らうの場を提供したにすぎません。短い期間ではありますが、お互に国民同志としてあらゆるこだわりをとりはらい、お互の心と心を通わせることができれば、と思つてゐるものであります。

思うに現在日本は、内憂外患正に累卵の危うさを感じしめるものがあります。そしてその最大のものは、思想の混迷よりする国家国民生活の分裂であります。

階級に或は世代に分れて、兄弟内に争う醜状は見るにたえません。そしてそれをそそのかすが如き言論、ジャーナリズムの横行。このままに放置すれば、私達の悲願である「日本の独立を達成する」ことはおろか、その思想的混迷のままに、内より敗れさるであります。

私達はこの様な語らいの場が、いささかでもこの国民生活の分裂を統一に向わしめるであろう事を、念じてゐるものであります。』

これに続いて、合宿事務を担当する富岡氏がこの合宿運営に当つての生活上の諸注意を述べ、引きつづき自己紹介入る。

見知らぬ人々と始めて会つた時の緊張した心も、話すことによつて、徐々に解けてゆくものか、笑顔は生れ、ユーモアも出て来る。

遠くは、大阪兵庫よりの四名、広島県よりの七名、九州よりの二名、島根よりの一名、東京よりの六名。あとは岡山県四十二名。

職業は、会社員二十三名。農業四名。公務員三名。教員五名。学生七名（内大学四、高校二、中学一）自営三名。その他四名。この内女性四名。

岡山在住会員三名（教員一、会社員二）他県よりの会員四名（自営一、教員三）講師六名。計六十二名。

殆んどが勤めをもった方達である。（その関係上、一日丈、又二日のみと云う方も若干あり、日により、人員の増減があった。）会社員の方の中には、労組の幹部の方も数人おられた。参加の動機を述べた方もあった。国民文化研究会とは、一体何なのか。隠された目的を理論でヴェールした「右翼」の集りではないのかという疑心暗鬼の気持で参加された方もあった。

午後劈頭名越講師は「合宿挙行にあたって」と題し現代日本の盲点を指摘、今や日本はその精神の空白の故に、はて知れぬ混迷を続けつつあることを痛論した。

『天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』といえはすぐ福沢諭吉を想いだす位、この言葉は現代日本

人の間に流行している。果して彼はこの言葉が代表するように、人間の平等を唱えた人なのであるか。「学問のすすめ」をひもとけば、彼は冒頭に「天は人の上に人を作らず人の下に人を作らず」という言葉を引用して、「されども世に貴人あり、下人あり、富人あり、貧人」があつて、差別がおこっているのは何故か。その差別の生ずるのは「学ぶと学ばざるとによりてできるものなり」と指摘している。彼はこの著述の中で、学問する意志を芽生えさせようとしたのである。彼のいう学問とは真摯なる求道の中より生れでる「独立自尊」の意志を培うことを意味する。彼は更に国民一人一人がこの「独立意志」を確立する時、国家の独立も確保できることを強調して「もし一国の自由を妨げんとする者あらば、世界万国を敵とするも恐るるに足らず」とまで痛論している。彼は人間を個人として目ざめさせる「独立不羈の精神」を鼓吹したのである。この精神的背景を掴まずしては福沢の把握とはいえぬのである。

現代流行思想の皮相性は論吉理解の浅さだけに現れている訳ではない。「一事が万事」ということばがあるように、それはあらゆる思考法にうかがえる。リンカーンの「人民の人民による人民の為の政治」ということばも、スローガン化して流行しているが、彼はゲティスバーグ演説の最後に、アメリカ国民に次のように激励しているのである。

1、戦死者が最後の全力をつくして身命を捧げた偉大な主義に対し、一層の献身をするため

2、戦死者の死をムダに終らしめないように、われわれがここで堅く決心するため

3、国家をして神のもとに、新しく自由の誕生をなさしめるため

4、人民の人民による人民のための政治を、地上から絶滅させないため（岩波文庫リンカーン演説集より）

即ちリンカーンのいうデモクラシーは、戦死者への慰霊という国民的共感に発しているのである。「神のもとに新しく自由の誕生をなさしめる」国民宗教原理に立った「人民の人民による人民のための政治」なのである。このゲティスバーク演説は共通の広場にたったデモクラシーを訴えているのである。リンカーンのいう People（人民）という言葉は、階級という言葉で局分するセクショナリズムではなくて、奴隷をも含めた最も広汎な国民大衆の、アメリカ的リバイバルを意味するのである。それを日本のように人民という言葉に階級的意義をもたせ、組合組織や圧力団体や政党の、エゴイズムを発揮する場と化しては、デモクラシーは死滅してしまうのである。

日本人に国民的人気を拍しつつあるネールにしても、彼の外交はどことも同盟を結ばない（ノン・アラインメント）自主的精神を基盤としている。このようなネールの自主独往の精神があのように広汎な影響力を獲得しているのである。そしてこのネールの信念は、彼がくりかえしいうように、釈迦、阿育王、ガンジーに承譜を仰ぐインドの国民的文化伝統であることを知らねばならない。彼は更に「インドのヴィジョンは本質的には

全世界に適用されるべき広大なヴィジョンである」といって、彼の把握した「インドナショナルリズム」は「古今に通じてあやまらず、中外にほどこしてもとらざる」思想信念にたっている。このネールを動かす思想的背景を知らずして、単にインドを中心とする第三勢力にあこがれるなら、それはネールへの追随となるに過ぎないのである。

現代流行の平和論にしても「再軍備反対」すれば平和になるという平和論なのである。この平和論はその実軍備は必要であるとする政治勢力に対する斗争論なのである。「平和斗争」と名づける所以である。だからこれは平和論ではなくて無防備論と防備論との斗争論なのである。歌ごえ運動などで歌っている「平和擁護の歌」の一節に「平和は戦争に勝つ」というのがあるが、これは平和勢力が戦争勢力に勝つという意味だから、平和擁護の歌ではなくて、戦争擁護の歌なのである。誠に現代の日本は平和運動家が斗争と混乱をまねく珍現象をおこしているのである。平和は世界各国の等しい願いである。そしてどこの国も自国の独立を保全すべく、防衛の為の軍備を持っている。この現実の上になつて平和が考えられねば意味はない。こういう意味での正しい平和論は殆んど見られぬといつてもいいのである。

まことに現代日本を覆うた思考後の分裂性はとどまることを知らぬ現状である。「戦争に負けてよかった」という虚脱状態から、過去の日本の全面的否定に走り、終には「日本は守るに値しない」という放言まで飛び

だす始末である。』

と現代日本の盲点をつき、聖徳太子の「群臣信なくんば万事悉くやぶる」という言葉を引用して『今や日本の上下を覆っているものは、不信の念ばかりではないか。日米安保条約は日本奴隸化の条約としか理解されず、国権の最高機関としての国会の権威は確立されていない。多数決原理に基いてつくられた国法は軽視され、悪法はまもるに値しないという意識は根強くビマンしている。このままで放置すれば日本の分裂は左翼か右翼かの暴力の台頭によらずしては収拾できなくなつてたであろう。しからばこの精神的空白を埋めるものは何か。これがこの合宿のテーマともいえよう』

と力強く結んだ。参加者の間に衝撃と動揺が生れた様である。緊張した雰囲気の中で全体討論を終え、少憩つゞいて

「所謂、資本主義社会と社会主義社会に就て」と題して石坂講師が登壇、大要左の如く述べた。

『現在、華新政党は言うに及ばず、学者、評論家、学生、労働者の大部分は、所謂資本主義経済は呪咀すべく変革さるべきものであって、日本復興の原理は社会主義革命以外に道なきものと信じ、中ソ一辺倒の見解を新聞、雑誌、単行本のみならず、教科書に迄展開してをる。彼らは資本主義社会の攻撃と、その崩壊の必然性を

説くこと甚だ詳細であるが、これに代る社会主義社会の日本における可能性については、余り語ろうとしない。果して社会主義社会は暴力革命方式によって国民の心に消え難い傷を残してまでも、実現しなくてはならぬものであるかどうか、又資本主義経済に代るだけの価値あるものであるかどうか。この検討が私の話の主題である。

彼らが資本主義は悪だとして攻撃している点は、一、所得分配の不平等 二、生産資材の配置の無政府性と浪費性 三、不景気と失業の排出 の三点である。現在の社会に貧富の差と失業者と不健全消費があることを知っている私は、当然このことを認める。しかし資本主義経済を原理的に考えれば、完全競争が行われている限り、市場価格を中心に生産者と消費者が最も合理的に行動するから、決して無政府的にはならない。第一に消費者は与えられる所得に於ては、貨幣の限界効用が等しくなるように支出しうるから、最大の満足を与える。第二に生産要因は各種産業に於て常に最も能率的な結合で使用される結果、その条件下では生産量は極大となり、各個の企業は能率的には最適の規模となりうる。完全競争が行われている限り、市場経済が浪費的であるとはいえない。ただ現実には独占状態がむしろ常態だから、諸種の矛盾は生れる。例えば所得の不平等は、資本主義であろうと社会主義であろうと存在している。だから資本主義に於ては現実に国家の力で種々の匡正策がとられている。税金政策、行政的許可制、補助金政策、社会保障、独占禁止、職業指導、最高価格

の設定等がこれである。又失業に関しては利子率、財政投資等の調節により、生産計画をたて、所得の不足を財政的にカバーしつつ、市場経済を基礎にしながら、完全雇傭の実現を達成しようとしている。

原理的には資本主義は何ら矛盾はないが、現実には諸種の矛盾が発生する。このことは社会主義が原理的に理想のごとく考えられながら現実には資本主義に見られぬ幾多の矛盾をもっているのと同様である。

社会主義社会になったからといって、魔術のごとく生活がよくなるわけではなく、むしろその逆が普通であろう。なぜなら経済の循環はいづれの体制でも同様であり、社会主義社会では私人の投資が国家の投資にかわるだけであり、国民所得になるのは純生産高と新規投資分の差額である。社会主義社会で莫大な生産が行われているように見えるのは、ノルマをあげたり、消費財に途方もない価格をつけて国民所得を吸いあげたりすることによって、名目賃銀や実質賃金を為政者が自由に切下げることが行われ、国民の犠牲に於て特定の物に過大な投資ができるからである。

また消費については、国民個人個人の希望は無視され、労働の配置は個人の希望によることは不可能であるから、到底文明人の耐えうる所ではない。資本主義経済で利潤を求め、売れそうな商品は危険を犯しても作り、一度成功すれば競争の結果その商品は安く良くなるというようなことは、社会主義社会では失敗の非難を極度に恐れる官僚がやる以上、到底実行される筈はない。尚生産財はすべて国の所有であるから、資本主義に

於るような合理的配置転換は不可能である。官僚による計画は人間である以上、時間的ズレと不経済はまぬかれ得べくもない。即ち一資材が不足すれば、他の資材が揃っていても一定期間生産のストップが行われるような、生産の跛行は必然的である。更に商業部門にしても農業部門にしても、中にたつ個人々が積極的に活動する動機を欠いておるから、動脈硬化による生産の低下は必然的である。この辻褄をあわせるものが、生活の末端にまで及ぶ嚴重な組織力である。この組織力を統制的に動かすには、冷酷な独裁政権と「相互批判自己批判」という摘発斗争が必要であることを思う時、革命を敢てしてまでその実現を期することは、それに値しないと考える。』

とのべて、最後に講師は次の語をもって結論とした。

『日本経済は海外への依存度が高く、日本の共産革命はポーランド、ハンガリーの例を見るまでもなく、中ソ経済への隷属を意味する。現実の社会はイデオロギーを超えて把握せられねばならない。だから現実社会を資本主義社会と定義することすら間違っている。資本主義という定義自体が、マルクスの唯物弁証法というイデオロギー史観の中で思考することになる。問題は個人々の経済的欲求が如何に総括的に実現されるか否かということである。だから資本主義か社会主義かというような二者択一的態度は、混乱をますだけで何の解決にもならない。経営者も労働者も共に生産者であり、生産の増加は双方を利するのである。世界中の国々が国力増

加の為に生産性向上に力を注いでいる時、日本国民のみが日本を分裂せしめる階級斗争史観にたつて、いたずらに兄弟内にせめぐ愚を演ずべきではない』

夕食後は「ソ連と中共を語る夕」を設けた。合宿参加者には在ソ十一年の児玉一真氏、杉本幸二氏、在ソ八年の池田進氏、更に会員の中で在ソ五年の名越、在ソ四年の富岡、在ソ二年の川合というように、期せずしてソ連抑留生活の経験者が集った。これらの人達の共産主義社会の生活経験をを通して、昼間の石坂講師の発表を如何に理解するかが、「ソ連と中共を語る夕」の第一の主題である。講師の発表が経済論を主としてなされた為、話もソヴェト計画経済を中心に「パネル式座談会」の形式をもってすすめられた。次にその要約を掲げる。

ソヴェト経
済の生産性

コルホーズへ働きに行っても、そこには農業生産の真剣な熱意は感ぜられない。収穫の時などまずジャガイモの茎だけぬいて、ころがり出た芋だけを拾ってゆく。地中に残っておろうが「二チエオー」だ。コルホーズでは何アールの土地を収穫したから、何%というように、ノルマ計算する。だから農民は茎だけぬいておいて、収穫したようにノルマ係に見せれば、それで自分の

給料はふえる仕組になっている。一々スコップで芋を掘りおこしては「社会主義的生産競争」の落伍者になつてしまう。更に農民の住宅のほとりに与えられた小さな「住宅私有地」は、よく耕されて草一本もない。それにくらべてコルホーズ所有地は草は生えほうだいで農法はすべてなげやりである。それに対して新聞は農民に草とりを怠らないように説き、とりいれの際は「階級的誠実」を要求する。このようなお説教が農民に守られるはずはない。次にはその新聞にこの要求が守られなかった実例を無数に報じ、漫画や投書欄で収穫方法の不誠意をつく。「革命以来くりかえして来たこの悪循環から何時脱出できるのであろうか。」これはいつわらざるコルホーズ農民の声である。

しかしこの声を表面化することは許されない。彼らは沈黙の行為に於て無抵抗的抵抗を試みるよりほかない。その端的な現れは、日常茶飯のごとく行われる泥棒行為であろう。農民達は私有を認められている牛や豚を養うために、収穫の一部を自分のうちにもちかえる。小麦や燕麦は自分の食糧用にまわす。「これは自分達が収穫したものだ。それなのに政府の役人どもがやってきて、ほとんどみんな持って行つてしまう。政府こそ泥棒だ」というのが彼らの言分である。

このような農民の抵抗に対して、コルホーズの指導者達はどうしているか。二十回党大会の時のフルシチョフ演説を引用すると「指導的なポストにはまだ「忙しい怠け者」の部類に属する働き手が残っている。かれら

は「三番鳥がなくなまで」會議をやり、そのあとでコルホーズをとびまわつて、遅れたコルホーズを罵り、會議を召集して、前から用意された一般的な演説をやり「試練にたえろ」あらゆる困難を克服せよ「信頼にこたえよ」など呼びかけている。のである。そして更にフルシチョフは「複雑鈍重な官僚主義が農業の發展を妨げている」「農民は彼らの生産に物質的利害と関心をもっていない」「官僚の間に不正行為が多い」「農民に高税をかけすぎる」「福祉施設が充分でない」「共産黨員が少くて取締りが不充分」などをあげている。それはソヴェト機構に対する抜本的反省ではなくて、国民に対する叱咤にすぎない。ソ連はこのように官僚機構内にあつて叱咤する者と叱咤される者と明らかに階級対立しているのである。このような官僚的メカニズムからくるソヴェト經濟の生産性の劣悪は、農業のみの姿でないことは勿論である。

ソヴェト製品の品質

茅誠司氏は次のような実例をあげておられる。「訪ソ中土産に買った十万円もするソ連製時計の竜頭が、帰国後一ヶ月で駄目になった。日本の時計屋に見せたら「こんなやわらかい金属を使っていたら使いものになりませんよ」と答えた」というのである。これに似た事例をわれわれは際限なく経験させられた。穴掘り作業に使うソ連のスコップは鋼鉄製でないから、すぐ切れなくなるし、一寸力をいれればグニャグニャになってしまう。帰国前に渡された新品のフワイカ（綿衣）は貰ったらすぐボタンをつけかえねばならない。更に縫目が粗雑で糸が完全に結着していない。ソ連製トラックの性能は戦

時中アメリカから援助物資としてうけ入れたベーキ（米国製トラック）にはるかに及ばない。故障したといつたらソ連製にきまっている。

一九五四年八月八日、ソ連最高会議に於てマレンコフは「我々は製品の質に於ても遅れていることを認めねばならない。これを真剣に改革する必要がある。目下のところソ連の購買者達は、しばしばよりよい外国製品の方を好む傾きがある」「多くの住居は設備不完全で、構造にも欠陥がある」ことを認めている。更にミコヤンは同じ会議で「資本主義国の商業企業のあるものが、研究に値する模範を示している。ソヴェト製品の品質不良……」を訴えて、ソ連人に反省を促している。当時のイズベスチャ紙にはそれに呼応するように「我々はまだ「剃刀の問題」の解決に到達していない。『星印』や『メトロ印』の剃刀は鋭いと思うとぢきにかけてしまふし、丈夫な場合にはちつとも剃れない」と示摘している。

商品の画一性

共産主義の菓子といえば、餡玉とビスケットとペロシキに限られる。餡玉もビスケットも同じ形で同じ味のものが一種類に限られる。昔はこつていた豪華なロシアケーキや、ロシア料理は一部高官や国賓の口には入っているようだが、ソヴェト庶民社会には見られない。ロシア料理は本場のロシアにはなくて、東京にあるという珍現象がおきている。石鹼と洗濯石鹼の区別はない。その石鹼には香料も入っておらず、色彩も薄黒いものである。服も規格で作られ、いきおい柄をえらぶ範囲も限定される。夏の

シャツやランニング、猿股などは、男のものと女のものの色分けさえもできていない。ソ連首脳は「創意を働かして新製品を作れ」と号令をかけるが、号令だけではオリジナリテイはでてこない。

ソヴェト商業の配給機能

我々は在ソ中行列買になやまされたものだ。零下十数度の寒さの中に妊婦がパンを買う為に何時間も行列を作って待っているあわれな姿が今も臉から離れない。行列買は革命後から現在に至るまでソ連人の共通したなげきの一つである。行列買だから買ったパンやマーガリンが古いか固いかいって交渉する余地はない。もし商店でその日の分が売れ残れば、青菜であろうが魚であろうが翌日まわし、腐った魚も野菜も数の中にいれられる。売る方としてもそうするより他に手はなく、消費者は又苦情のもってゆき場もない。結局その損失を負担するのは消費者である。マレンコフはそれらの事実を実証するように一九五四年の最高会議で、「我国では何かの品物を買おうとする者が、それを見つけて、よその町まで旅をしなければならぬ場合が、まだ余りにも頻繁である」といつている。ミコヤンは二十回党大会で、配給の遅延、配達中の破損の事実を指摘し、実例として冬にはフェルト長靴が見あたらぬが、夏にはこれが山と積まれるような皮肉な場合をあげている。

サービス精神

全産業国営の共産国家では売子も散髪屋も歯医者もすべて国家公務員なのである。国家公務員は配給品を売ればよいという官僚的本質から離れることはできない。散髪屋は一日のノ

ルマ十三人の頭をかればよいという義務感からのがれる事はできない。齒医者のような技巧を要する仕事でも十五人という「治療者数」をだせばよい。サービス精神を起せというのは、いう方が無理というものである。

ミコヤンは最高会議で「多くの店の売子達は不親切で消費者の苦情を軽視し、しばしば粗暴ですらある。通商関係者の中には盗みや詐欺を行う者が絶えない。」と指摘し一九五三年の全連邦商業労働者会議ではスターリングラードのある百貨店で、客が中央アジア産の木綿織物の売場はどこかとたずねたところ、織物売場の売子が「あたしゃ案内所じゃないからね、おばさん」と答えた実例をあげてサービス精神の喚起につとめてい

発展の不均等性

モスコイ大学の豪華ぶりは、招待された日本人の目を奪うものがある。メトロ（地下鉄）の華麗さも世界一を誇っている。オリンピックその他で示すソ連の集団競技、ロシヤバレエの壮大、ボルショイ劇場の絢爛、近くはICBM、人工衛星の打上げで、世界にソ連科学の威力を誇った。このように宣伝的意義と国防的意義をもつものは度外れた豪勢ぶりである。世界の人達の脳裡につくられつつあるソ連のイメージは「万国労働者農民の偉大なる城砦」にふさわしいものがあるようである。

しかし一般労働者農民の知識水準や生活程度はどうか。ソ連の首都モスコイを過ぎて四十キロ程離れたコル

ホーズにゆくと、収穫物を運搬するトラック道路も満足についていない始末である。収穫物を運搬する為には密林から材木を伐つて自ら道路を敷設しながら前進せねばならない。このような未開ぶりであるからコルホーズには電燈がなくてランプで生活している。日本でいえば明治初年を思わす生活ぶりである。その他各地でみられたことだが、住宅が少くて一室に一世帯というのが殆んどである。ひどい所は広い一室に三世帯も四世帯も雑居し、夜はカーテンだけでさえぎっている場合がある。

この事実を裏づけるようにマレンコフは最高会議で「住宅の建設は遅々としており、新企業のうちには労働者傭員の住居について気をくばらない者がある。多くの住居は設備不完全で構造にも欠陥がある」といつている。更にミコヤンは「多くの地方では肉やハム、ソーセージ、バター、魚などが不足している。我々は最近外国からバターの輸入を余儀なくされている有様だ。地方によってはパンの質がまだ思わしくない。野菜類の供給改善が殆んど行われていない。公設市場の半数は倉庫も冷凍も備えていない。」ことを認めている。このような生活水準の低さと不便にもかかわらず国民は異口同音にメトロを誇りモスコウ大学を自慢する。国民はみんな超国家主義教育をほどこされてソ連以上の国はないと確信している。資本主義はやがてほろびて、世界は共産主義になってしまふというメシヤ思想のトリコになっている。知識水準といえば日本には電車があるかと本気で聞いたり、円周の計算のできない将校連中がいたり、時計を珍重して日本人から五つも六つも奪取して腕

にまいて喜ぶ兵士達がいたりする。そして最後に特筆すべき事は強制労働収容所であろう。望樓と柵をめぐらしたこの施設はソ連全土に見られ、収容された人員は或人は八百万といい、或人は千五百万といい、或人は二千万という。その数は確認し難いとしても、彼らが共産社会建設のための奴隷的労働をあてがわれていることはたしかである。ヤボンスキーサムライと共に銃剣に追われながら、氷雪の中で最下位の仕事に黙々と従事している彼ら囚人の姿は、ソ連のどこに行っても見られる地獄図画である。誠にソ連では「陽のあたる場所」に置かれた少数の産業や国民と、「陽のあたらぬ場所」に置かれた多数のそれらとは真昼と暗黒程の相違となつて現われている。

以上るとのべたように、共産主義国家は結局搾取の主体が、個人の民間産業の経営者から国家に移つたといえよう。民間の各種独占企業形態が国家独占資本一本に統制されたということができよう。全産業国营に基づく計画経済の運営者が、国家そのものとなり、一元的な国家統制のもとに律せられるようになる。即ち共産主義国とは「一大官僚国家」の別名なのである。

すべてが官僚組織による計画経済だから、国民個々の嗜好や生活必要品目や必要量は五カ年計画にもとづいてゴスプランが決めてしまうのである。この地方はパンがこれくらい、ビスケットがこれくらい、ウオッカが

どれくらいというように。だから国民個々の需要量は事務官僚がきめるよりほかないのである。国民の需要量はその日によって、その月によって様々に変わっている。日々の生活必需品であるパンのようなものでも、四五日分買いためたい人もあろうし、お客がある場合があろうし、記念日やメーデーには多く要る場合がある。又中にはジャガイモとかその他のものを主食代用にしたい人もあって、大衆の需要量は天下りに決められるものではない。いわんや菓子とか衣料とかになると、人間の嗜好は様々に派生する。だから時々刻々変化してゆく国民の必要量を正確に掴むことはできるものではない。にもかかわらず官僚的計画経済は国民の欲望を一々ゴスプランで決めて、それを平均必要量として、計画的生産を命ずるのである。だからあるものは不足し、あるものは過剰となって過不足は毎日起ってくる。更には新製品を作れと命令しても、実際に発案する所はゴスプランだから、そこだけではスバライイ創意はでてこない。資本主義国の製品を真似るのがせいぜいということになる。その上官僚は煩雑な計画事務に追われているから新製品をだすと、それだけ事務のわずらわしさが生じてくる。だからいきおい物の規格を一つか二つ位に標準化して、大量生産を命ずるよりほかなくなる。

このようにして決めた計画目標は天下りの下部に対して目標達成の圧力をかけてゆくよりほかない。計画目標を達成できなかつたら、夫々の責任者は更迭左遷の危険がある。責任者達は自分の地位をおびやかされる

か、出世をめざすかして動く。同一の品種の製品にしても、手のこんだ骨の折れるものを作るより、簡単で比較的楽なものを作つて、外観上の生産目標を達成した方が得策となる。ソヴェト経済の品質の粗悪はこういう所に原因しているのである。

更に共産国では職業選択の自由も認めることはできなくなる。政府が生産の計画をたてて、計画通りに生産を行うためには、どうしても労働を計画的にそれぞれの生産門部に配当することが必要になる。たとえば石炭を増産しなければならぬ場合、希望者を新に募集するような方法はとれない。ソ連には失業者のような遊休労働者はいないのだから、何処か他の職場から移動させねばならない。自由意志によって職業を許していたら、その職場に穴があいて、ソヴェト経済の歯車は狂ってしまう。結局赤紙一枚で命令的に配置転換するよりほか方法はない。職業の配置も本人の希望をきいていたら、いやな職につく者はいなくなる。そして失業者もできなくなる。結局はどここの軍隊でもやっているように、一応希望を聞いて最後には強制的に人員を配置するより他

なくなる。

更に共産国では、国家という名で搾取が強制せられる。即ち政府が五カ年計画で、軍需生産の大きな計画を立てたとする。すると、それに要する資本は、労働者の搾取によつてなされる。つまり労働者が政府から月給をもらう前に、政府は計画しただけの資本を、源泉において、搾取している訳である。これに対してストとか

団交とかで、月給値上げの運動でも起したら、計画目標が途切ずれになるから、ストや値上げ運動の自由は与えられない。このことはロシア人は人が良いとか悪いとかとは全く無関係に行われている事である。だから機構をそのままにしておいて官僚主義を克服し得たとしても、人間の意志とは無関係に自動的に行われる搾取のカラクリから、脱出することはできぬのである。この自由抑圧の張本人は官僚組織というメカニズムそのものである。共産国に飢饉が遇発して餓死者を出したりするのはこのメカニズムの仕業なのである。

結局、「搾取なき自由の国」として宣伝せられた魔法理論も、種をあかせば全産業国营という官僚体制を作ることにすぎなかった。「大善は悪に似たり」とか「この世に天国を作ろうとすれば地獄になる」という諺があるが、これらはそっくりそのまま共産社会の諷刺としか思えない。このような天国地獄論はどのような発想法の誤謬にその端を発しているであろうか。

正常なる経済社会にあつては、どういう品物がどういう割合で生産されるかは、無数の売り手買手の競争によつて自然に決まる。それをうまく調整する役割を果しているのが「価格」である。生産が必要に足りなければ価格があがり、価格があがれば自然に生産が増加する。これは別に政府が介入する必要はない。「見えない」

「神の手」によつて自然に操作されている。それは久しい人間の生活経験が擱んだ叡知の所産である。マルクス理論はこれをそのまま理解せず「商業の中間搾取」という結果論で把握する。このさかだち理論を暴力をもつて現実の経済社会に適用すれば、経済の機能を失つた計画経済の空想社会が出現する。

我々はこのような経済機能の失われた国から、経済活動の充分に満された自由なる国に帰つてきた。果せるかなその時引揚寮の売店に並べられた商品の豊富さには、目を奪うものがあつた。在ソ中の習慣から我々は一せに行列を作つた。並びながらも売り切れるのではないかという心配が先にたつた。しかしいくら買つても売り切れることはなかつた。売り切れれば品物は次々と送られてくる。商品の種類の多いこと、品質の優れていること、品物一つ一つにこもる消費者への親切、信用尊重への着意、あふれるように愛嬌をたたえた売子のサービス、そこに本当の商業の姿を見る思いがした。

我々が帰郷して接した日本の農村は、青々として、すみずみまで深く耕されている。農民は土地に対しても作物に対しても、根深い愛着をもっている。誰に命令されなくても起床と同時に田圃を見てまわる。そして肥料の分量に全神経を集中する。それはさながら愛児を育てることくである。収穫は丁寧で落穂まで拾われる。収穫物を一晚田圃に広げていても泥棒にさらわれる心配はない。我々は日本農民の真摯な態度に尊い労働者の姿を仰いだ。

自由なる社会秩序—それは人間性のそのままなる反映社会である。人間性を守るには、自然なる社会秩序を開発するよりほかない。従つて学問体系もこの人間性の把握の上に展開されねばならない。

孔子は「七十にして心の欲する所に従えども則を超えず」といい、親鸞は九十二才にして「浄土真宗に帰すれども、真実の心はあり難し」といつて自己の永遠に至りえぬ姿を悲嘆痛哭した。孔子と親鸞とどちらがより深く人間性の真実をうたつてゐるかの評価はさておいて、ソヴェト経済論自体が、人間はすべて七十才の孔子の心境にいつでもおるといふ独断の上に展開されているのである。生産手段の社会主義的所有に基く計画経済は、国民全部が七十才の孔子の心境に達しなければ実現も成功もおぼつかないのである。レーニンはマルクス主義を「正しいが故に全能である」と狂信した。この狂信の中からはマルクス主義の修正論は創造されず、終始一貫人間性の犠牲を強制する結果となつた。即ち「教養上の革命」といふ命題をもつて、人間改造を試みるより他なかつた。即ち彼は最後の「心の欲する所に従えどもノリを超えない」人間の養成に向つたのである。スターリンもレーニンの遺志をうけついで公益優先の「ソヴェト的人間」というロボット的人形を空想して、人間変革に力を注いだ。かくして人間は精神の自由を失つて理論と制度の前に完全に屈服したのである。

現在の共産国家になつて官僚主義の弊風は「製品の品質低下」「配給不円滑」「生産性の劣悪」「サービス精神の欠除」「商品の画一性」「発展の不均等」等々の諸欠陥を暴露した。「存在が意識を決定する」といふ

唯物論の命題に従えば、それらの欠陥は共產制度そのものにある。その時如何に「官僚主義の打破」「教養上の革命」「ソヴェト的人間」「整風運動」等の長口演説を並べてみても、このような「唯心論」的方法では解決されるものではない。イタリヤ共産党書記長トリアッチさえもいうように、制度の改革という「唯物論」的方法によってのみ根本的刷新がはかれる事を銘記せねばならない。彼らの学問上の誤謬は自らの刃をもって自らの理論の自殺をはかるのである。』

つづいて木下彪講師が登壇、共産主義対策への私見と題して中ソ両国の思想戦略に対する鋭い見識を激情こめて訴えられた。

『私は岡大へ来る前、外務省研修所の講師として、中国班で話をしていた。その昔は中国の新聞にいたこともあり、中国のことについては永く注意をしてくれている。そういう経験から率直に真実を訴えたい。』

明治の対露支政策

明治四年わが外務省に、漢語学所と露語学所が設けられた。支那語、ロシア語を教え、将来両国に活動する人物を養成するためである。これは後に文部省に移管され、外国語学校に合併されたが、明治の先覚者達は、日本の将来がこの両隣りの大陸にあることに着目し、欧米文明の吸収に熱中する傍ら、支那、ロシアに対してもこれだけの用意はしていたのである。果せるかな日清戦争に

も日露戦争にも、ここで養成されている人物が非常な働きをしている。兵書に「己を知り彼を知るは百戦危うからず」とあるが、日本は中国人やロシア人が、日本を小国と見て小馬鹿にしていた時、充分彼を知って対処していたのである。当時を指導した外交家として、日清に陸奥外務大臣あり、日露に小村外務大臣があった。これは明治の二大外交家で、これに続いて内田伯は小村侯につぐ偉大な外務大臣であったが、それ以後日本には偉い外交家がない。その上日本人は日清戦争後には「チャンコロ」という言葉が代表するように支那を軽侮し、日露戦争後には「ロスケ」という言葉が代表するようにロシアを軽侮し、爾来この二大隣国を研究することを忘れてしまった。

大正以後の対中ソ政策

そして外国からは世界の一等国といわれ、自らは東亜の盟主をもつて自任し、東亜のことは欧米の極東政策と協調するだけで、中国についてはまるで眼中になかった。その当時の無能な対支外交に見切をつけた軍人達は、元来外交のうしろ楯となるべき軍事力を外交に先行させて満洲事変を起した。その頃の満洲では「軍人が起たなければ満鉄社員が起つ」といった位、対満支外交は無能無策であった。対ソ政策についていえば露国革命以後のソ連の赤化宣伝に対する対策は幼稚極るものであった。日本は思想戦の意義がわからず、すべて守勢にたつて、最後にはゾルゲ尾崎秀実事件が代表するように、国家転覆の大陰謀にひっかかってしまった。これも日本が戦捷におごつて中国、ロシアを研究しなかつた

結果というよりほかない。

戦後の対中ソ政策

戦後中国は共産化し、ソ連と共に大きな共産勢力として日本の上にのしかかって来た。その上敗戦で一弱小国に墮ちた日本を、この二国は「中ソ友好同盟条約」によって仮想敵国にしている。ところが日本は何十年研究を怠ったむくいがきて、この二大帝国の正体がかみせず確固とした対共産圏対策もうちだせずおびえきっている。そこで或者はアメリカに頼ってこれに対せよといい、或者は中ソに追随して社会主義化（実は共産化）し、その支配に甘んじようとする。一般大衆はいつまでも戦後の虚脱感から脱去できず、どちらとも判断がつかないでいる。これがいつわらざる日本の状態である。

現在中国は二つにわかれ大陸は中共が支配しているが、国連では中華民国が認められている。日本の中共に対する国策は一定せず保守党は台湾の中国を承認し、社会党は中共を承認しようとして対立している。この外交上の対立をうまくとらえながら中共は対日政策を着々と進めつつある。即ち中共は日本をアメリカから引離し、日本を共産圏にひき入れるために硬軟自在の戦略を展開しつつある。つまり東欧がソ連の衛星国であるように、日本や朝鮮、ビルマ、ベトナム等を、自国の衛星国にしようという下心があつて、これらの国を「解放」しようとしている。中共の共産革命が現在の日本人に美化して伝えられているのは中共の対日政策の第一の成功である。今日の中国革命の一応の成功は、中国の農民が心から共産党に味方したのではない。全人口の

九割を占める農民に土地を与えるという空約束と、共産イデオロギーという新迷信の注入と、各村々で実施した人民裁判による戦慄の戦術、この三つが今日の中国をきずいた大きな要素であった。特に大衆裁判による大量処刑は民衆を恐怖の中に沈黙させてしまった。処刑者の数一千万、その惨虐は中国三千年の歴史にもかつてないものであった。その悲惨なる屍の廃墟の上でできあがった今日の中国共産帝国である。今度も百花斉放等といった、言論の自由をよそおい反共分子を摘発しようとしたため花は開かず、皆雑草となって大陸にはびこったという。

支那事変にしても、そのシナリオは中共が書いたものである。西安事件という伏線をはって国民政府を抗日にかりたて、その間に共産党の拡大につとめた。当時の排日抗日主戦論の演出者は中国共産党であった。日本は動かずとも、やがて中国から事を起してくるにきまっていたものを、芦溝橋でひっかかった。日本は不拡大方針であったが、裏面における中国共産党の拡大方針と、それに気脈を通じた日本国内の第五列、左翼陣営の「長期戦論」「百年戦争論」にひきづられて、日本は泥沼に足をつっこんでしまった。そして右翼はきれいに左翼の笛に踊らされてしまった。かくして「支那事変を解決するためには米英をうつより他ない」という国策の大変更となって現れた。日本陸軍は対ソ作戦を対米英作戦にきりかえた。結局日本民族は左翼右翼の呉越同舟にのせられて奈落の水路を急行させられたのだ。日本民族も軍人も右翼も結局共産党のオリジナルシナリオ

のテーマを看破することができなかった。シナリオライター達はこの戦争の演出が余りにもシナリオ通りなのに手をたたいてよろこんでいた。なかでも中国共産党、別して毛沢東のよろこびようは一通りでなかったであろう。この戦争のために中共は火事泥的に大きくなり、焼け肥りしてしまった。これも考えて見れば、日本が中国を知らなかったために、中共にしてやられたのである。この味を忘れられない中共は今でも日本をうまくだまして自国勢力下に抑えてしまおうとする。中共としては今の日本を抑えてしまうのは何でもないが、背後にアメリカが控えているのでどうにもならない。台湾ですらアメリカ第七艦隊がいる為に、台湾解放と口走るだけで一向手がつけられない。そこで中共はかつてソ連が中国に用いた手を学んで、日本に革命を起させようとしている。社会党、総評、日教組、大学教授、左翼文化人、こういう人達に非常な力をいれている。やれ招待だ、友好だといって、莫大な金を投じて都合のよい所だけ見せる。微笑と握手と甘言で老練な外交手腕を示せば、国際感覚に乏しい世間知らずの日本人は一べんに参ってしまう。しかも中共は日本の二八・五倍という大国としての量的バックがある。その上六億の人間が蟻のように一糸みだれず建設に従っている。朝鮮戦線では人海戦術という無畏なる集団特攻精神を発揮する。蠅をとれといえ一せいに蠅とり運動に協力する。レーニン帽中山服を着るともいわないのに皆んな着ている。それは戦争中の日本以上の統制ぶりである。それは「見てスバラシイ中共」といえよう。表面しか見ることのできない日本人は、先方の希望通りに中共礼讃を

やる。だから毛沢東や周恩来はこのシンプルな日本人を見て、十年以内に日本を共産化できるといふ自信をもつようになる。

日本民族への提言

お人好しで無邪気で、マッカーサーがいった十二才の子供のような現代日本人の他愛なきはこの通りである。陸奥伯や小村侯や内田伯や、畏れ多いが明治天皇の御霊も、今では地下に慟哭しておられるであろう。明治初年以來、日清日露の窮地を脱出して、日本を世界の強大一等国にしたのは誰であったか。そして敗戦という国家非常事態の中に独立の意志を失って、世界のどの弱小国にも見られぬ国内の思想分裂をもたらした責任は誰に帰せられるべきか。そして尚他国の風下にたつことを煽動するお先棒かつきは誰か。この点こそ現代青年に再思して貰いたい所である。

現代二大陣營が対立して第三次大戦の危険が叫ばれている時、右にあらず、左にあらず、股ぐら膏薬の様にどちらにつくか当てにならない日本の遅疑ぶりである。だから西欧側からも信頼されず、中ソ側からはいつもねらわれる。韓国の李承晩は率直に云っている。「日本は敵でもない。味方でもない。味方なら味方、敵なら敵としてあつかい様があるがどちらにひっくり返るかわからないもの程厄介なものはない。朝鮮戦争で我々は百万以上の犠牲を出した。今は六十万の韓国青年が三十八度線を守って共産軍と対峙しているから日本人は枕を高くしておれるが、もし朝鮮全島が共産側の手に落ちたら日本は安泰でいられるか。朝鮮の南端にゼット機

の飛行場が出来、ロケット砲が並んだら日本人は安眠出来るか。朝鮮戦争で我々が国連軍と共に自由の旗のもとに戦った時日本の青年はパチンコをやり、ストリップをみて遊んでいたではないか。西はトルコの方からも出兵して居るのにすぐ近くの日本は一兵も送らず見物して特需でもうけただけである。こんなずるい国が口先きで自由主義国と云っても信頼できるものではない」と。日韓交渉が何年たつてもまとまらない筈である。

更に目を中共に向ければかの国は今原子炉を建造中である。日本で沖繩々と騒いでいるうちに中共は核兵器を持って大国の威容を備えたいとあせっているようである。北鮮や大陸沿岸にいつ秘密裡に核兵器が陳列されるかわからない。韓国为国連軍も近く核武装するそうである。確かに韓国は日本のために赤色勢力侵入の防波堤となっている事は我々は率直にこれを認めねばなるまい。それがわかっていて、しかもわからないのが今の日本人のなさけなさというものである。李承晩大統領と同じことは蔣介石総統も考えている。』

とのべて、中国興亡の政治変遷の中に達人のごとくきたえられた蔣総統の言葉を引例して、結局日本民族は国際感覚の薄弱のために、独伊について大東亜戦争を起したように、来るべき時代も対共感覚の無能の故に、再び墓穴をほるよりほかないではないか、と痛論せられた。そして最後に民国の元外務大臣で、先に香港から他へ亡命した某氏から、講師の所へ来た最近の手紙の一

部を次のように直訳して参考に供せられた。

「貴国青年思想左傾し、中共を礼讃し奉ずること神明の如し、是非を弁せず、一味盲従、これを以て群衆を導き」云々「中共の為すところ、もっぱら欺瞞宣伝にして、鏡幕内人民の疾苦、ひとり自由を鉗制するのみならず、日に恐怖の中に処し、人民を芻狗にし、任意驅使、我に順したがふものは生、我に逆さからふものは死、甚しきは数千年の文化を毀滅し、史実を顛倒し」云々「凡そこの事実、分析弁正して学子をして誘惑を受けしめず、主宰する所あれば庶こゝろはくは此の狂瀾を挽くべし」云々。」

体験から発した余りにも切実な講師の訴えは、共産主義の洗礼をうけない人々には首肯できない点があつたかも知れない。しかし直接共産社会を体験した人達にとっては、講師の訴えはすべての射を射ていて、思はず快哉を叫ばされた。

共産主義のもつユートピア性とサタン性は、余程の体験と理論をもたねば看破できない。その上共産国は罪刑法定主義の原則をやぶつて遡求して刑罰を課する。即ち資本主義時代の罪惡にも遡求して極刑の対象にする。この恐怖心理に訴えるやり方は正しい国民運動を大きく阻害している。ここに共産主義対策の困難性がある。捨身の勇氣と、真実に対して忠実な信仰をもたねば、

対決できるものではない。

我々は今自由か隷従か、人間性を守るかそれを喪失するか、歴史の経験を生すか革命によってそれを破壊するか、という歴史の審判の前に立たされている。それはまさしく現代における十字架の確認である。

合宿第一日の日程はこれで終った。はげしい爆発的な言葉が連続なげかけられて、参加者一人一人の心に激流がおこっていることはたしかである。学問研究とはマスコミの雰囲気、協調を保ちつつ、知識を誇り新奇を目ざすモダニズムとは無縁のものである。それは人間の魂に意志の建立を促すことであるとは、福沢諭吉が「学問のすすめ」に強調しているところである。是は是とし、非は非とする権利主義（福沢によれば英語の *Right* にあたる）の確立こそ彼は念願であったのである。

それではその是非を下す批判の原理はどこに仰ぐべきか。敗戦のショックはオーソドックスな日本の思考法を混沌に陥らせてしまった。我らは本来の思想法にたたねばならぬ。そのために

現代を二つに分断している公式主義「ブルジョア民主主義かプロレタリア民主主義か」「資本主義か社会主義か」「憲法改正是非か」というような、イデオロギー的思考法の脱皮から入らねばならぬ。その時我らは確固とした現実に立脚する史観にたつことができるであろう。確固とした現実、それは日本国民生活における自然なる秩序の探求を意味する。ネールがインドの文化伝統を背景に、自信をもってインドナショナルリズムを唱導していることは、我々にとって無上の教訓である。第二日は、本合宿の眼目とするこの問題に焦点をしぼったのである。

八月二十五日（日）晴

合宿第二日 民族の指標を求めて

|| ニホンナシヨナリズム確立の爲に ||

限られた時間内に問題が次々と提出されて、友らは苦しい内心のたゞかいと、新しい期待とを交錯させながら、今日の行事を見守っている。

今日の講義は石村暢五郎講師によって口火がきられた。

演題は経済学の日本の思考である。

- 一、世界史の潮流と日本の地位
- 二、日本建国の意味、聖徳太子創造の意味
- 三、二宮尊徳に見る一円史観の経済学的展開
- 四、佐蔵信淵に見る経済学の展開

五、経済学の日本的思考と近代経済学

六、経済政策の方法に見る日本の型

七、現下日本経済の地位と使命

以上広汎な視野にわたって一時間半正確な資料を背景に堂々たる立論を展開した。特に講師が強調した点は、佐藤信淵が父子五代にわたって展開した老大な経済学体系についてである。

『西洋の経済学がエコノマイズ Economize (節約する)』という言葉にその端を發し、抽象性を誇るあまり、あるエッセンスを除く以外の、都合の悪いものはすべて蒸溜してしまふ傾向があるのに比べて、わが信淵の経済学は「国土を経緯し、蒼生を濟救する」国土経営と国民救済の学としての雄大な風格をもっているのである。抽象化された理論体系を整えることよりも、現実打開の方途を追求するリアルな生命体系をもっている点に最大の特長点があるといえよう。更に二宮尊徳の経済学は、儒教思想をその背景にもっていて「一円相の哲学体系」にたっている。たとえば経済学の財の概念にしても、尊徳は「財は自財に非ず、他財に非ず」自他の対立を超えた「天財天録」であるといつて、財を消費する場合は天財の所以を知つて、そのものの生命をまっとうし、物そのものを充分に活用する経済倫理をとっているのである。更に財の本質については「一粒たりと

も天地人の三徳によって生ずる」といつている。これは今日の労働価値説が「財はわが労働の結果作ったものであるから、わがもの、わが階級のものとする」考え方の批判である。尊徳の考え方によれば、財の徳は人間の労働のみならず、天地の営みもこれにあずかっている。即ち一切の生命を哺育する天地の徳こそ財の根源であるというのである。』

そして信淵の「経済と政治との相関的思考法」、及び尊徳の「経済倫理」が聖徳太子の総合的文化精神の流れをくんでいることを文献をあげて力説し、講義は現実の日本経済の問題にうつつた。

『日本経済は外国依存によって、生きてゐる。其の原因は、産業資源の枯渇と、それによる輸入でもたらす外貨不足と、人口過剰にある。日本経済復興の爲には、国内資源を基礎として、産業設備投資を増大し、これら産業の助長策を積極化し、外国依存による投資過剰を抑制しなくてはならない。又東南亜貿易に於ては、欧州決済同盟の如き、アジア決済同盟機構の結成が必要である』

と力説し、最後に

『今日日本経済の危機をまねいた根本原因はどこにあるか。これを率直にいうと、政策の誤りもあるが、一つには国民精神の欠除にあるといわねばならない。実際の実力以上に賃金を獲得し、減税を行い、消費を煽

り、それが過大消費となつて輸入増大をきたしている。しかも一國の基礎産業部面には資本と労働は集らず、消費娯楽面のみに重点が移行しつつある。これらの点については信淵とか尊徳を知らない、現在の西ドイツの方がうまく実践しているといわねばならない。温古知新ということを私は今程痛感することはない』（詳しくは国民文化叢書Ⅰ「日本經濟の方向」参照のこと）

石村講師の講義は、經濟学といへば西欧經濟学説史しか教わらなかつた我々にとつて、驚異に値する問題提起であつた。しかも現實の日本經濟の分析は、觀念的理論大系を拒否して、あくまで經濟現象の事實に即した着実な思考方法で貫かれていた。

つづいて南波恕一講師は「古典のいのち」と題して、親しみ深い重厚な論調で訴えた。特に講師の講義は、單なる古典の紹介や讚美ではなく、過去の歴史に生きた人格への敬虔な憶念と、あふれるような情意の抑揚に貫かれて、参加者にふかふかとした感動を与えた。

古事記のもつ二
十世紀的価値

古典の古典たる所以は、それが特定の個人の著作である場合も、なおかつその民族の全体生活から生み出され、個性の痕跡をとどめぬほどの綜合的作品たる点にある。また

古典の古典たる所以は、それがその民族の固有の魂の表現であると同時に、人類全体の共感と評価に耐えうる

世界的作品たる点にある。詩経を生んだ中国民族、イリアッドを生んだギリシャ民族は幸いであった。古典古事記を生んだわが日本民族もまた幸いである。「言靈の幸わう国」と語りついで来たわが日本民族は、とりわけ古典のいのちを尊び、古典の恩寵に生きて来た民族である。この伝統をゆるがせにしてよいであらうか。

日本古典の冒頭に輝くは、いうまでもなく古事記である。それは単にイナバのシロウサギの物語に止まるものではない。それは二十世紀に生きる現代日本人の物語なのである。すでに早く江戸時代に於いて、本居宣長はかかる立場から古事記研究に畢生の情熱を傾けた。その著「古事記伝」が明らかにした古代日本語の本質生命は、その核心に於いて、日本民族のあるかぎり永久にほろびない。古典に対する近代科学の精緻な分析は大切である。しかし、科学的分析のその奥処に、古典の生命そのものを直観するのでなければ、研究は畢竟スコラ的冗舌に終るのではないか。

宣長の古訓古事記によれば、上巻（神代巻）の初葉に次の一節がある。「かれおのもおのもよさしたまへる命のまにまに知ろしめす中に、速須佐之男命、よさしたまへる国を知らさずて、八つかひげむなさきに至るまで、啼きいさちき。その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣き枯らし、河海はことごとに泣き乾しき。」スサノオノミコト、疾風にして怒濤の如く荒ぶる男神は、なぜかくばかりはげしく慟哭したのであるか。「吾は姑の国根の堅洲国に罷らむとおもふが故に」泣いたのである。母の乳房を慕う幼児の如く、運命の苛酷を怒り泣

いたのである。

明治の先覚者正岡子規は、かつて古事記を読んでこのくだりに至り、はげしい感動に身ふるいしつつ、「身の毛のよだつごとく強き和文」と評した。この一句、よく古事記の生命に肉迫したものといえよう。母国を恋いこがれて、山河草木を滅尽するが如き慟哭。これは二千年前の昔に非ず、まことに今次戦争に於ける異境留同胞の心情そのものではあるまいか。漠北の、また南海のはてに幾歳月を抑留された人々の悲哭をしのべば、古事記のこの一節はそのまま現前の民族的号泣である。古典が現代に生きるとは比喩に非ず、眼前の現実なのである。

万葉の
宇宙感情

「万葉」とは何の意か。「万代」であり、「万感」でもある。万葉集は民族と共に永遠なる歌集であり、わが古代人の千思万感を歌い上げた国民詩集でもある。編集大伴家持の熱い祈り、民族の永生をこい願う熱い祈りが、この国民的大歌集を成就させたのである。皇室、貴族のみならず、東国の名もなき庶民の歌が、「東歌」や「防人の歌」として纏められているところに、万葉集の比類ない価値がある。これこそ日本人が世界に誇ってよい古典ではないか。

「わたつみの豊旗雲に入日さし今宵の月夜まさやかにこそ」万葉集卷一天智天皇の御作である。見はるかす大海原のはて、悠然として豊かに棚びく雲、落日は赤々と照らして、静寂壮嚴を極めたる海と空。小我を忘れ

て宇宙の大に没入するこの感激。しかも日落つればやがて月はのぼる。今宵晴れたる夜空に、群星のかけも消ゆるまで煌々と、はるばると照りわたるであろう月光の世界。この雄渾にしておおらかなる音調は、まことに王者の氣宇を表現して余蘊がない。昼と夜、日と月、空と海、転変參差する自然の運行に、深く深く息づくような生命の充盈感がここにある。この宇宙感情こそ比類なき万葉の詩魂である。しかもいと大いなるものは、いと小さきものにつながる。生命とはつながりであるから。「稲刈ればかがる吾が手を今宵かも殿の若子がとりてなげかむ」これはまた何という可憐な若妻の心であろう。「東歌」の一首である。東国辺境の地に営々として働く農民。その勤勞のはげしさの故にこそ湧き上る夫婦の愛情がここに歌われている。こまやかないたわりと強くしなやかな若い夫婦の愛情がここにある。率直で、虚飾を知らぬ庶民の生活感情が素朴な修辭に流露していて、まことに心温まるものがある。「わたつみの豊旗雲」をうたう王者の心も、「かがる吾が手」をなげく庶民の心も、一つに渾融して生命の讚歌を奏でる、ここに万葉の世界があるのだ。

聖徳太子の 文化創業

紀元六世紀から七世紀にかけて、随唐帝国を中心に活動する東アジア国際政局のさ中に、日本の独立と日本文化の創成に、その生涯を捧げたのは聖徳太子その人であった。

政治的には南鮮に於ける任那の回復、文化的に仏教信仰の受容。太子はこの難局に身を以て対処し、創業の苦痛と確信とを吐露して、これを万代に伝えた。「十七条憲法」と「三経義疏」とは不滅の古典である。太子に

於いて苦惱とは「世間虚仮」、確信とは「唯仏是真」の語に端的である。太子念持仏と伝えられる法隆寺夢臺の救世観音像を仰ぐ者は、その荒々しい野性の相貌に畏怖の念を抱くであろう。太子は常時この仏を拝したのか。然らば太子に於いて、「世間虚仮」とは行いすましたる学僧の諦念ではない。自ら人生の修羅をかけめぐり、流血死屍をふみ越えて来た者の、激しいなげきであったと見ねばなるまい。日本書記をよむ者は誰しも当代に於ける内外政局の混迷、骨肉相食む閥族闘争の惨劇に目を蔽うであろう。この動乱のまった中に太子は摂政として生きた。まことに「世間虚仮」とは単なる仏語の概念に非ず、太子の人生苦そのものが深く息づいているのだ。しかし太子ははつきりと断言する、否、告白するといった方がよい、「唯仏是真」と。「仏」とは何よりも永遠の慈悲であった、真実であった。皇子山やましろおおえ皆大兄王は皇位継承の内乱の渦中であつて、「一身の故にあに豈万民を勞せんや」と述べて一族自決したのである。「しなてる片岡山に、飯いに餓えてこやせる旅人あはれ、親なしに汝なれなりけめや、さすたけの君はや亡き、飯に餓てこやせるその旅人あはれ」という太子の歌はさながら仏の声であつた。

鎌倉期の創造精神
と親鸞の人生凝視

太子より六〇〇年、時代は古代より中世への転変期、公家政治の行詰りを打破して
茲に鎌倉幕府が成立した。頼朝が卒先して東大寺の復興につとめた頃より、天平文化
への回帰、古典再興の機運が旺然と盛り上つた。たとえば奈良西郊の秋篠寺金堂に婉然としてうなじを傾ける

伎芸天像は、天平期の乾漆造頭部に、鎌倉期の補修にかかる木造の肢体をつなげたものであるが、異った材質を以て、かくも見事な調和と均整の美を造出した手腕には全く驚くのほかはない。それは古典の伝統に如何に忠実であつたかを物語ると共に、鎌倉期の創造意欲が如何に新鮮闊達であつたかを示すものである。なぜならその新しい肢体には天平彫刻には見られぬ自由奔放な動きがあるからである。巨匠運慶が彫んだ興福寺北円堂の無著像にしても、この古インド大乘仏教の聖僧を模した等身大の木彫は、沈静にして自若、しかも清朗の氣みなぎり、さながら鎌倉期宗教改革者の典型を見る心地がするが、これ運慶の新しい人間創造であると共に、唐招提寺藏唐僧鑑真の像に見られる如き天平古式の復活でもあつたのである。然しながらこの旺然たる民族の活力は、親鸞の信仰に於いて最も深刻な表現を得たといえよう。

「和国の教主聖徳王」と讃えて、民族信仰の源泉を聖徳太子に憶念した親鸞は、九十年の長い生涯の末に次の如く述懐した。「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし。」この徹底せる罪惡の自覚。感傷もこまかしも許さぬ冷徹そのもの人間凝視。「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり。」ここまで非情の自己内省は、ついに一切の善行を拒否し自力を放下して、阿弥陀如来の大いなる慈悲に一向専念に帰依する。「修善も雑毒なる故に、虚仮の行とそなづけたる。」永遠に救われざる者の悲歎告白が却つて、あくなき生への意志をかきたてるという信仰の機微を親鸞は示した。九

十年の生涯も彼にとつては短かすぎたのではあるまいか。

二つの世界にたゆ とう実朝の詩魂

「人麻呂ののちの歌よみ誰かあらむ征夷大將軍源実朝」と詠んだのは正岡子規であった。人麻呂以後第一の歌人というは、しかし実朝の才能の評価にのみ止らない。むしろ万葉調の歌人云為の如きアラギ流の公式論でもない。「もののふの矢並つくらふ籠手の上に蔽たばしる那須の篠原」の作に、子規は武家の棟梁、征夷大將軍源実朝の気概をよみとつたのである。柔弱無能、ひたすら公家風の遊樂に耽つたという俗説には目もくれなかつた子規の見識を思うべきである。実朝は何よりもまず鎌倉幕府の將軍であつた。新興武家勢力の運命は彼の肩にあつた。古い公家社会と新しい武家社会との相剋、大きな時代変動期に直面してこの天与の詩人は、しかし單純に武士の腕力と野心を肯定することができなかつた。彼が公家文化に憧れたのは、新旧時代の断層に身を没して、自らがその裂目になることによつて、二つの時代をつないだのだ。鶴岡八幡宮の杜前に、正月の新雪を血で染めながら、音もなく非業の死をとげたという事實には、どこか殉教者の最期を髣髴させるものがある。彼の苦悶は次の歌に明らかである。「玉くしげ箱根のみうみけれあれや二くにかけて中にたゆたふ。」彼は箱根権現にしばしば参詣した。そこは父頼朝以来源家の厚い信仰の対象であつた。しかし実朝は源家の武運長久を祈願するよりも、何か別の祈りをこらしているようだ。箱根の湖（芦の湖）は静かに揺れながら相模、駿河の二国につながる。箱根の湖を見て「けけれ（心

の東国訛)あれや」と口をついて出たことばは、新旧二つの世界にたゆとう彼日頃の鬱情の吐露ではなかつたか。大きな時代の方向には決定をためらう心も、いわけなき童心には忽ち共感して、喘ぐばかりの情熱をふき上げる。「いとほしや見るに涙もとどまらず親のなき子の母をたづぬる」「乳房すふまだいとけなきみどり子と共に泣きぬる年の暮かな。」ここには歌をよもうという気持さえもなく、ただ内心の切なる訴えを、率直大胆に表白したまでの如くである。しかしそこに真実の詩魂があるのではないか。「時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ」この堂々として確固たる重量感、一國の將軍たる責任の重さから生れたものであろうが、それはしかし、「いとほしや見るに涙もとどまらず」と歌って、かよはき孤兒にも注いだ溢るる如き哀愁の至情にこそ裏づけられていたのである。「金碓和歌集」はやはり万葉集以後第一の歌集であつた。子規の評価は誤つてはいないと思う。』

諄々ととく講師の古典への追憶は宣長、素行、松陰に言及し、最後に明治時代にまで及んだ。講師は明治以降古典のいのちがそのままの姿で生きてゐるのは、天皇の御製であり、岡倉天心であり、正岡子規であることを指摘し、日本文化精神の系譜をその源流にたつて解明した。そしてこれら一連の思想系譜は、世界の哲学宗教に伍して遜色のないものであり、むしろ世界の精神史を照破する広大なヴィジョンをもつものであることを強調して降壇した。

一時間半にわたる深い情意に裏づけられた各種の資料の駆使は、さながら精神史のパノラマであつた。

南波講師の強調した国民的文化伝統の回復―それは単なる過去の憧憬や事実の分析だけで実現できるものではない。そのような感傷主義、傍観主義はきびしい国際情勢の渦流の中にはかなくもおし流されてしまふであらう。我々は日本文化の系譜を掲げて世界精神の試練の中に雄々しく立たねばならぬ。世界の渦流に棹さす民族の創造的精神こそ、現代に期待される最重要の課題といわねばならない。

国民文化研究会創立の思想的源流と仰ぐ聖徳太子は、このような課題を奈良朝時代に果された歴史的偉人である。太子はこの問題に対し一時的政治的な解決を求めず、思想的振幅の広さと深さに於て日本文化創業の基礎を確立せられたのである。

高木尚一講師は午後一時から、本合宿のエキスとして採用した「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を中心に、**聖徳太子研究と現代**と題し、次のように講義した。

『マスコミの攻勢の中に、ともすれば真偽の判断に迷う現代の人々が、もし一人々々本当に我に帰って、「人間はいかに生くべきか」を真剣に考えはじめるとき、その人の魂は無限の成長への一步をふみだしたことになる。だが何を基準に真偽の判断が可能か、いかなる示標により魂の成長が可能かは、簡単にわかるものではない。ここにはじめて幾多の思想文化の先駆的開拓者の足跡を謙虚にたどらうという求道心がわいてくる。もしそうでなければ人間精神にはいつまでたっても、開展の道は与えられないのである。

終戦後日本人は未曾有の敗戦による極度の自信喪失により、日本人位劣等で文化的レベルの低いものはないという始末であった。だから我国文化史上幾多の先駆者が、外来文化に対しいかに考え、幾多の思想的対立、宗教上の争い等に、いか処してきたかを、文献的にしらべ研究する気力も起さず、外国から宣伝される民主主義、社会主義、共産主義に対して、自主的に批判する見識もたなかつた。

最近では漸く落着きをとりもどし、古いものはすべて悪なりとして否定する風潮は表面影をひそめたけれども、日本文化の先駆的開拓者が、外国文化に対していかに自主的に批判摂取する苦斗をくりかえしてきたかを、究明しようとする志気はまだ高まっていはいない。

今日自然科学の驚異的進歩にもかかわらず、精神科学界、社会科学界にあつては、意外な程自由な思索と体験告白、批判研究が阻害せられている。学界がセクシヨナリズムの枠の中に、低迷して生々無息の研究求道が行

われていないことは、やがて日本の政治力にも影響を与えてくる。それは現在の日本が内治外交共に活力を失いつつあることと直接関連づけて考えられるのである。

かかる時に今より千二百年前、国政の紊乱、外国の侵攻、閥族の専横斗争の中に、外国宗教たる仏教の採択に深厚卓抜の指導力を發揮せられた聖徳太子の御事業と、信念体験の跡をつぶさに研究することは、極めて意義あることと信ずる。

聖徳太子の研究は古来多くの人によって行われているが、昭和のはじめに三十一才の短い生涯を、太子の研究と有為の学生の指導に捧げつくし、太子の生きたお言葉をそのまま青年の胸に植えつけて逝かれた若き篤学の土黒上正一郎の遺著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」は永久の生命をたたえた名著である。黒上氏のまごころこめた遺著により、太子の「共に是凡夫のみ」という同じ人間としての人間性に深く徹した平等観による宗教教化と政治活動の道とが明らかにされ、更には現実逃避の解脱思想、個我的欲望に執着する迷妄とを併せて批判する大乘仏教の真髓が明かにされた。

黒上氏の研究によれば、我国民生活にとって、外来文化との接触による重大転機が前後二回あった。即ち先には東洋文化にはじめて接した推古朝と、後には西洋文化を輸入した明治明代がこれである。この前後二回の

重大転機に、聖徳太子、明治天皇という大指導者をいただきながら、その方々のかくれた御体験の跡は、ともすれば忘れさられんとしている。

現代は推古朝明治時代に直接つながるものであり、これら先覚の指導者の遺志は、外国文化の摂取批判にあたって、決して安易な道をとるべきでないことを戒められている。殊に今日唯物弁証法を基盤とする社会主義、共産主義の理論は、革命の理論であると同時に、ソ連圏の国々の政治指導原理として、絶大な国家組織をバックとする宣伝力そのものでもある。この時にあたって、精神科学的研究は、理論と実際、概念と事実、認識の主体と客体等、相互関連を緻密につけながら、真剣勝負の気魄をもって行われるべきである。刻明な史実の認証と判断、精緻なる批判論証により、着実に行われる研究活動は、外面の世俗的権力、豪華長大なる体系のこけおどしにもひるまず、何よりも固定概念をもって事実を歪曲しようとする陰謀宣伝に対して、はげしく戦わねばならぬのである。

この戦いの中に鍛えられる「和」の精神こそは、永遠に国家を支える信念であり、社会主義、共産主義がその発生当時に包蔵したヒューマニズムを、現実には正しく国政の上に發揮するであろう。そして、現実人生への適用に際して起ってくるソーシャリズム、マルキシズムの数々の誤謬を、余すなく批判折伏する原理ともなるのである。われら一人でも多く志を同うしてこの文化史的使命の遂行に邁進しよう。』

高木講師は一高時代黒上正一郎氏に直接師事し、研鑽を共にしただけに、講義内容は豊富を極め、講義のはしはしにただよう詩情は、亡き黒上先生の人格をも髣髴させるものがあった。

これで午後の講義を終り、班別討論にうつった。各班ごとに提出された問題は多岐にわたり、現実の政治問題、経済政策、労働運動、日教組問題、文化運動等、整理するに困難をおぼえる問題ばかりであったが、参加した人達にひとしくうけとって貰えたことは、この合宿を通じてえた異様な感動であった。或人は「戦前戦後を通じてはじめてふれたシロツクにも似た感動」ともらしていた。特に本日集注的にふれた日本文化精神の系流は参加した人達の魂に「人生的宿題」を提出したといえよう。参加者の間から期せずして「このような世界観的背景のもとに、現実の政治を如何に把握するか」が共通の問題として提起されてきた。

夕食後はこの問題に応えるべく、浜田、小田村両講師の登場をお願いすることにした。

先ず浜田收二郎講師は、共同通信社政治部文部省担当記者の経験から「日本教職員組合は現状から脱却すべし」と題して、およそ四十分間、次のように強調した。

教師は教師である

「教師はいうまでもなく労働者である」という言は日教組（日本教職員組合）の倫理綱領に明記され、同綱領を貫く基本的な考えとなつてゐる。一方では時おり、でも先生」という言葉が使われている。でも先生とは、先生にでもなろうかと、腰掛けのつもりで教職に在る者を総称するものだといふ。勤務評定反対などでデモする教師の意味ではない。でも先生などという言い方は、極く一部の事例をとらえた無責任な放言というには、余りにも教師の方々にとって心外なことに違ひないし、およそ職業の尊さをわきまえぬ潜越な批評である。しかし「教師は労働者である。」ことについてはどうなのであるか。

教師は労働者であるとの規定が、教師は資本家階級なるものを覆滅すべき労働者階級の有力な一員であるといふ、マルクス主義の立場から為されてゐることは明白であるが、今はそのことを、倫理綱領を詳細に分析することによつて述べようとは思わない。ただ問題は、大多数の教師は「教師は労働者である。」と同意感くらしいに解してゐるのではなからうかといふことである。労働者というならば、そのことは正しい。会社の部長も職工も、お百姓さんも芸能人も商人も、ことごとく労働者であるから、「教師は労働者である。」との命題は、格別の意味を持たない。しかしながら「教師は労働者である。」といふことになる、労働者と違つた少くも極めて特定の意味において、教師を定義づけてゐることぐらいは、看破して然るべきであらう。

さらにこの一句が、日教組の背骨であることを考えるならば、日教組の組合員にとって、労働者であるとの一句は、それぞれの好みによって自己流に解釈して済まし得る事柄とは思えない。すなわち正確にその意味を判断しなくてはならないものと考ええる。のみならず、現代において組合の持つ社会的、有効的意義を深く思うならば、組合と自己を自由に分合できるが如く考えるのは誤りであろうし、また公的自己をある時は組合員として、ある時はそうでない者として使いわけける立場をとろうとすることも、避けなければなるまい。組合の動向について、絶えず同調ないしは批判の姿勢をくずさざるべきである。このことは、国の政治を鋭敏に批判是正する共通の権利と使命が、国民一人一人に課せられているのと同断であるといっても過言ではあるまい。

世人は、教師を労働者とはみていない。また勤労者であるとも評しない。教師とは何かと問われたならば、「先生は先生である。」と答えるだろう。勤務評定問題が起ると、日教組ではす早く「教師は特別なものであるから。勤務評定を実施すべきでない。」ことを打出した。特別なものとは、労働者であるというのではない。学童を教育する特殊な職務に従っているとの意味である。何故ならば、労働者であれば厳密な勤務の評定を受くべきもので、勤務時間や作業量と離れた労働者はあり得ないからである。つまりこの特別なものとは、倫理綱領の労働者とおよそ正反対の概念である。特殊なものと労働者とは両立しないのである。にもかかわらず教師の

定性格が、かくの如く早変りするということは、食言や違約とは質を異にする。綱領無視の根本問題である。この一事をもつてしても、教師は労働者であるとの倫理綱領は、教師を一方的に規制したものの以外の何物でもないことは明らかである。先に倫理綱領を分析批判することを差控えたが、この綱領なるものは、名称の大きさのわりに、つまらぬものであることだけを指摘しておきたい。教師は労働者ではなく、また特別なものでもない。教師は教師である。

矛盾ではなく て精神的分裂

日教組が一教師を労働者と規定したり、特別なものといったりすることは、先に述べた通り、驚くべき矛盾である。矛盾とは、最強のホコと不敗のタテが両立しないとの故事の如く、外的事象の説明である。しかしこの日教組の矛盾は、外的事象ではない。個々の教師にとって、者になつたり、特別なものになつたり、明白に教師そのものの矛盾である。それは、中共と国府の両政府に対し、外交上のシレンマにとりつかれたり、米ソ両国とのかけひきに戸惑つたりする矛盾とは異なることはいうまでもなく、愛憎の葛藤とか、刻々変化する客観情勢に処して決断に迷うといった状態でもない。すなわち内心の分裂である。精神的分裂である。労働者と特別なものとの間に、何んらのつながりもないからである。

日教組はある時は労働者としてある時は特別なものとして個々の組合員との行動を要求し、これを指令する。そしてその通り行動が起される。この場合、外見の行動は一様であるけれども、内面の精神は引きさかれ

ている。かかる事態は、盲従といわずして何とよぶべきか。行動が意志に基くべきことは民主社会の鉄則である。そうして精神の分散を統一していく過程が、人間の意志というものであろう。それにもかかわらず、痛ましくも精心を引きさき、意志の形成を切断するが如き性質の指令が、こともなげに実行されるとするならば、民主社会の破壊であると断言してはばからない。倫理綱領にいう「教師は労働者なり。」との言葉の魔性を、この現実の成行きに照して正確に判断すべきである。

速かに現状を
脱却せよ

およそ、内心の分裂を放てきして、もしくはこれに気づかずして、行動を起すことほど、無責任なものはなく、またそれ故に危険なものはない、それは一切の自由や不幸を、外的条件のせいとなし、『概念的空想に、とりつかれた無軌道な途を辿るであらうことは、人間心理の必然である。』

日教組は、勤務評定は教師の特殊性からみて、実施すべきでないとの立場よりも、勤務評定は教育の権力支配を目ざすものであるから断乎反対するという。全組合員の意識の統一をここに求めようとしている。先に述べた精神的分裂は、どこかにサラリと消え、勤務評定反対の建前を、権力斗争に切換えたのである。すなわち内面の分裂を放てきした果敢な行動の要求である。いったいこれ以上の人間無視は他にあるだろうか。このことは政治以前の問題であり、組合以前の問題そのものの問題でもある。

日教組はまた、勤評阻止等貫徹するためには結局、彼我の力関係を逆転せしめねばならぬという。かりに彼我の力関係なるものが逆転し、権力支配もなくなり、勤務評定などでは立消えとなった場合、どうなるか。その時生れるであろうユートピア的教育界を支えるものは、教師という聖職意識しかないではないか。しかるに教組は倫理綱領に於て教師に労働者というワクを設け、画一的概念の中に意識を統制しようとするのである。

かかる状態で、教師が無垢な学童に対して純一な気持ちで教育を施し得るとは思えない。「社会の仕組みを教えない道徳教育は意味がない。」「平和に直結しない道徳教育は偽りである。」とは、教組出身議員とそれに同調する教育学者の公言する所である。複雑多岐な社会の仕組みや、国際社会において現実に全く相反する概念を含む平和なるものは、義務教育の学童の理解するほど生やさしいものではない。にもかかわらず、あえてその教育を強調することは、日教組が権力斗争に組合員を動員する意図と密着するものがある。学童をかかえる政治的テーマから守っていくことが、むしろ教育というべきものである。

日教組は速かに現状から脱却すべきである。もしこのまま進めば、組合にとつて将来とりかえしのつかない不幸を招く。それには最少限、次の諸要件が必要であらう。

一、「教師は教師である。」をモットーとした、教職員の清風運動を展開する。

一、労働組合総評会議（総評）から脱退し、教師は労働者に非ずとの立場を鮮明にするとともに、個々の教師の内心を分裂に導くような盲目的権力斗争を排除する。

一、広義の労働組合であるから、管理職者の組合不加入等の労働慣行を確立する

一、義務制の小、中学校と高校とは、それぞれ独自の校種別の組合を結成し、勤務条件の改善を強力に推進する。』

つづいて小田村寅二郎講師は、一高在学時代から学生運動に身を投じてきた豊富な経験を基礎に、政治をめぐる原理的問題を「人間性に立脚する政治」と題して、卓抜明解に論断した。

人間の自由と 国家の自由

人間は生れながらにして自由を求めている。その求める自由を、さまざまの形で取得しながら、この世の中には十人十色の人間像が存在している。すなわち人間が求める自由は、抽象的には「自由」という同一の言葉で概括できるかも知れないが、現実的に各人が求めている自由の内容を一人一人にわたって説明することは至難である。路傍のモク拾いが求めている自由と、一国の首相が求めてやまない自由とは夫々の内容を同日に論ずることは無理であろう。すなわち、人間は精神的には同一の自由を求めて生きているが、現実的には十人十色さまざまの自由を考えているのである。したがって、「自由」ということを考えるにあたっては、「人間はすべて平等に自由を求めるもの」であると同時に「人間は十人十色

の自由を求めているものである」という、二つの命題を同じ価値ある出発点として把握することが大切であるとおもう。私はこれからこの二つの命題について検討するのであるが、先づここで現代人に案外忘れられている「十人十色の自由」の方から検討してみることにする。

我々が現実の社会に目を放せばそれはそのまま十人十色の世界であつて、各人は夫々自己の自由を満喫しようとして生きていることを気づかしめられる。人間社会はさまざまの環境と境遇の差の中から、色々の個性が派生しているのが事実であつて、もし規格に画一された同じ人間が生まれてくるとするならば、それはすでに人間世界ではあり得ないであろう。考えても見られよ。同じ父母の間からさえ、その年令差や精神的物質的条件によつて、異つた胎児が生みだされる事実を。ましてや国土の相違、気温の差異を考えてみて、全世界に生れる人間なるものは、ことごとく十人十色であるにちがいないのである。この原則は否定することのできない鉄則であつて、抽象的にいう自由の追求のかけに、このことあるのを無視するわけにはいかない。しかし今の世の中では、自由を論ずる多くの人々が、この十人十色の鉄則を軽視してそれを論じているきらいがあるであろうか。政治をあつかひ、文化を語る人々のなかに、同じ過誤を犯している人々がいはしないであろうか。また国際間の政治、文化のことについても、不用意な「自由」がスローガン化されたり、かたよつた、それゆえにまぢがった「自由」が誇大に喧伝せられているきらいはないであろうか。

共産主義が人間の階級差をなくすれば、世の中が平和になるというのも抽象的自由の追求についてだけの解明である。したがってソビエトロシヤに今日のような強権的階級差異が生れているのも、その道の弁護者たちがいうように、決して過渡的のものとはいえないのである。なぜならば、自由についての今一つの命題であるところの「人間は本来十人十色である」ということについての完全なる無視が、その根本に宿っているからである。

古い資本主義が、十人十色の一面を高く評価して、人間の自由追求を軽視したことは前者と同じあやまりを犯したものといえよう。しかしながら自由の名のもとに人間を画一視することと、十人十色とみる見方との双方を比較すれば、後者がみとめられることの方が、前者よりもはるかに「人間」にとっては幸福であり、「人間らしい」在り方であることはいいうることであろう。なぜならば、人間は生れながらにして自由であるといふよりも、生れながらにして十人十色である、ということの方が、もっと先天的なことであり、人間の本質に近い問題であるからである。人間は生れながらにして自由であるというのは、自由でありたい、という人間の理念的なものを含んでいるに反して、十人十色というのは、何等の理念をも含まぬところの現実そのものの指摘であるからである。古い資本主義は、前にもいうように共産主義と同じようなあやまりを犯してはいるが、双方の非を対等に排することもまた、前述の理由によってあやまりであることを知らねばならない。いいかえ

れば、資本主義は是正されなければならないにしても、是正する可能性をその中にもっているものであり、共產主義は根本から人間の先天性よりも人間の観念性の上に立っているがゆえに、これは是正されるという範囲よりも、はるかに根本的な修正と反省がなければ、人間の幸福にはプラスするものといえないものである、という見方に到達するのがある。

人間個々人について自由を考えると、以上のようなのであるが、国家の自由を考えるとどういうことになるだろうか。今の日本では、人間の自由は盛んに論ぜられ、考えられているが、国家の自由ということになると、人間の自由を主張する人々でありながら、妙に消極的になったり、または否定的な態度をする人々すらいる。人間の集りとして出来ている国家に、もし人間と同じように自由を考えていけないとするならば、その自由についての主張や論議は自由を求める精神に於て徹底しない中途半端なものになっているのではあるまいか。

自由を求めるということは、もとより自我の主張や、利我のためのものであつてはならないのであるから、個人の自由、人間の自由を考える場合でも、この点の混同があつてはならないことは、申すまでもないことである。国家についての自由もまた、同じことであつて、排外的なことや、侵略的な主張、独善的な態度は、もとより論外のことである。しかしそれにもかかわらず、国家の自由はなければならぬものであるし、これを主張し、強調することを躊躇する今日の世相は、何かしら卑屈なものがあるのではないであらうか。自由と

は、いいかえれば独立不羈の精神でもあるし、独立心ともいえよう。国家の自由は国家の独立が名実共に現存するところのみありうるのであって、理不尽な外国の威圧に屈してしまうのでは、これは到底、実存すべくもないものである。果して日本の現状は国家の自由があるのであるか。制限された自由は果して、自由の名に値するものであろうか。ましてや、制限された自由を得々として自由らしく錯覚し、その錯覚をマスコミに便乗させて、国民に常識化させようとする気配はないであらうか。そして国家の自由を口にするには、ただちにそれが帝国主義や軍国主義につながるものであるかのこととき宣伝が、広くゆきわたってしまっていないであらうか。

しかしこうした現実面を指摘するよりまえに、一つここでとりあげなければならぬ問題があるとおもう。それは国家というものについての考え方のことである。人間の社会を考える際に、人間個人と人間全体、すなわち個人と人類との二つを考えることが流行してきて、国家は過渡的のもの、部分的のものであるという考え方が、広く行きわたってしまったことである。この考え方は人類の発展史上からみて、また、今後の人類の発展のために、果して正しい見方なのであろうか。

地球上の人類の分布を平面的にみれば、たしかに国家の構成は、その各部分であり、平面的にみる限り、世界は一つで、国家はその一部であるとの見方は正しいといえる。しかし同時に、世界には未開の一部の人々を

のぞき、国籍のない人々は一人もいないことも事実である。このごろの日本人たちが自分は日本人であるよりも先に人類の一員だ、といくらいつてみた所が、世界の人々は、いずれも自国民であることを誇りとして、人類の一員であることを考えているのである。それは彼らが国民であることと人類の一員であることを、區別して考える間隙もなければ、またその必要もみとめていないからであらう。

全世界の人々にとっては、国家こそは自分たち人間の自由を最後まで親身になって保護してくれるただ一つの拠り所であるのだ。だから彼らは国家を離れて世界を考えることが、いかに空漠たることであり、また無駄なことであり、それゆえに世界と人類の進展にマイナスのことであるかを、知りつくしているのである。更に又国家という政治単位を通じてこそ世界に発言の広場も持てるし、世界の動向を是正するみちもありうるのだということも世界の人々には共通の常識となつているのである。

したがって政治単位としての国家に命をささげることが、すべての国民に是認せられ、またたえられても来たことであるし、将来とも、これがかわることはなさそうである。無名戦士の墓が、世界各国いずれの国においても鄭重に扱われているのもその証左であるし、祖国をなくしたユダヤ人が、目下ユダヤ国の建設にあらゆる財力と知力をそいでいるのも、同じ理由によることであらう。

これらのことを通じて考えると、「国家は部分的なもので人類が全体的なものである、したがって国家とか

祖国とか、日本とかを余り口にするのは、近代文明人として恥づべきことである。」というような流行思想は、実は、世界の人々から、およそ遊離した観念論であることが判ってくる。いなむしろ、世界の人々は、われわれ日本人に劣らず人類の平和と幸福をねがいがら、国家の向上と国力の強化と、自国の対外発言権の強大化を念じて、人間生活の個人的自由をあえて制限する態度にでていると見られるのである。いいかえれば、個人の自由が大切であるが故に、国家の自由をより以上に大切なものと考え、国家の自立が個人に優先することを、理解しているのである。

こう考えてくると、今日の日本で個人の自由、人間の自由がさげられるに反比例して、国家の自由、祖国の強化が遠ざけられている傾向は、真の自由を考える人々にとっては、まことに不可解な現象とみるほかはないのである。日本人であるわれわれにとっては、日本はやはり最高の対象体であり、祖国日本の発言権を通してでなければ、日本人が世界の平和に寄与する大本はたたないことを反省しなくてはならないであろう。それは世界いずれの国民、いずれの人間においても同じ進み方をしてるのであって、決して独善的なものではないことを確認したいものである。

デモクラシーに於ける
価値通減の法則

いままで私は人間の自由ということを考え、更に国家の自由を考えてきたが、次にわれわれの身边に眼をかえして見て、われわれはデモクラシーという政治制度のなか

で、自由の意志を正しく行使しているかどうかにふれてみたい。

「国民一人一人が主権者である。」ということばは、国民個人は、本来の自由を形の上では獲得しているということの意味する。主権というのは国家の最高の権威であるからである。しかしデモクラシーといい、また主権在民という美しい名のもとに、もし勝手気儘な無秩序が存在するとするならば、それは主権者である国民一人一人の責任に帰するものとみなさなければならぬであろう。

私はいま、デモクラシーという美しい名の下に無秩序があるならば、と申した。それはどういうことをさしたのか、次のことを聞いてみていただきたいとおもう。

デモクラシーには選挙というものがつきものである。投票によって各々の人が主権を行使するのだといわれているくらいに、選挙が必ずともなうものである。しかし、静かに考えてみると、四五十人のクラスのなかから組長を選出したたり、二〇〇人位の団体で平素お互に知りあっているグループから、その代表者を選出するときは、この理想は、まずまず達成されるとみてよい。すなわち学級における組長選挙や同業者の組合長選出などの場合は、生活環境や、業態環境のなかに、或る程度の同一性と均一性が存在するのである。したがって選挙に当って、各々の投票者は、誰がその任に適するかについての基本的な判断力をもっているから、デモ

ラシーの本旨に沿った選挙が行えるのである。しかしながらこのことから、必ずしも少数者のなかでなくては理想的な選挙ができない、ということにはならない。たとえば、全国的な同業者からの組合長選出や、スポーツ団体においてその代表者の選出などの場合、その立候補者が部外者でなくて、同業に専任している場合や、スポーツで実践をかさねてきた人々の場合はかなり理想的に選挙が行いうる基盤をもっているといえるであろう。しかしながらこの場合でも、選挙運動に類する行為が高度に加味される場合は、別である。

大体、選挙の本質は、自薦ではなくして他薦にあることはいうまでもないことである。選挙がデモクラシーの理想の範囲を逸脱しないでつづきうるのは、自薦の様相よりも、他薦の雰囲気がつよいときに限られるといつても過言ではない。ましてや、投票者と立候補者が、平時においてお互に面識もなく、相互理解も持たない場合の選挙は、デモクラシーの価値はその稀薄の度合に依りて、遞減していくものである。私はこれを「デモクラシーの価値遞減の法則」とよぶことにしようと思つてゐる。

形式だけが公正ならば、どんな選挙でも公平なものである、というのが今の世の中の通念であるならば、私は断乎として、その非を主張したいとおもう。いくらおまえは主権者だとおだてられても、わからない選挙に、かりたてられて、とにかく箱の中に一票を入れてこい、というくらいおかしい話はなからうし、一票入れてくれば、それで主権者のつとめを果たしたことになるというのも、あまりに形式的なきめ方ではないであらうか。

ましてデモクラシーの本義が他薦にあるにもかかわらず、自薦他薦の峻別や、選挙運動―これは自薦運動である―の成否によって人氣が湧くという、今日の選挙は、一体デモクラシーの本義からみれば、雲泥もただならぬほど懸隔しているものではないであろうか。国会議員選挙も、県会議員選挙もこの例にもれないし、わずかに村会議員選挙においてデモクラシーの趣旨が生かされているだけではなからうか。

しかしだからといって私は選挙を否定しようとするものでもないし、デモクラシーの長所を理解しないものでもない。ただ主権在民とか、国民が主権者であるとかいうことについては、全国民がいま一度深く考えてみる必要があることを強調したのであって、主権者の立場から、投票する行為そのものだけが大切であるように考えならされたところから、なんとか脱皮しなければならぬことを主張したのである。

そこで、このことを今一段深めて考えてみることにしよう。直接選挙―(国会・県会・市町村会議員選挙のように、その役目につく人を直接投票する選挙)―の場合でも、いま述べたように、デモクラシーの真価が減じてしまうのであるから、ましてや間接選挙になるとこの点は一層はなほだしい結果をもたらしてくる。間接選挙の一番代表的なものは、日教組本部の役員選挙や、総評幹部の選出選挙などを例にあげればよいであろう。

日教組の場合でみると、先ず市・町・村の組合幹部、すなわち地教組とよばれるものが選出せられ、それらの組合幹部が、県教組とよばれるものを選出する。その幹部が日教組幹部を選出していくことになる。したが

って個々の学校の一人一人の先生が投票しているのは、一番下の組織の組合幹部だけであって、何回もの間接選挙が行われたうえで、五十万人といわれる日教組組合員のなかから、日教組幹部が選出されている。組合の主権者（？）である個々の組合員の意志は、形式の上では、次々に上位に継承せられているから、いかにも総意を代表した最高幹部が選出されていることになる。しかしそれはあくまでも一つの形式上のことだけであって、実質的には個々の組合員の意思とは、全く異った素質の人々が上に立つこともありうるわけである。ここにもはっきりとしたデモクラシーの価値通減の法則が、よみとられるわけである。

そこで選挙や、投票することだけが、主権者の資格であったり、組合員の義務であったりするのは、正しいデモクラシーは行われなくなることには気づかなくてはならない。立候補者のすべてをよくしらないために、投票する自信もなくて投票している選挙や、前述のように度々の間接選挙をかさねた場合などは、殊にこの点を考えなければならない。すなわち、選挙が完了してひとたびとのえられた組織体においても、その代表者から出される指令や命令について、もし良心的判断から賛成しかねるものがある場合は、その時こそ、主権者としてまた、組合の主権者（？）として、正当にその指令を峻拒し、または反対する立場をとらなくてはならないことである。私はかりにこれを「指令峻拒の権利」となづけておきたいとおもう。

一つの組合の幹部は、われわれ組合員が選出したものであるから、次の改選期まではその中央指令に服さな

ければならないという考え方には自ら一定の限界がある、ということである。投票の権利と同じく指令峻拒の権利のあることを、今日のデモクラシーはよく教えているのであろうか。ましてや労働運動における度かさなる間接選挙などの組織体においては、このことが最も大切なことであるにかかわらず、少しもあきらかにされておられない。組合幹部への盲従が、いくたのあやまちを生みだしていることを非難するよりも、むしろ個々の組合員のデモクラシーについての無知が悪用されていることを指摘する方が、重大である。投票を了えさえすればわが義務おわれりとする位、デモクラシーの悲劇はない。労働組合において然り、政治家の選出において然りである。このことは更にくわしく論をすすめなければならぬが、いまここでは時間の都合もあり、大局的の指摘だけにとどめておくこととする。ただくりかえすようであるが、自薦運動の選挙戦には、真のデモクラシーの精神は消えつつあることと、間接選挙のときは、デモクラシーの価値は極端に自動的に稀薄になってゆくものであること、この二つの点だけは、はっきり御記憶ねがいたいとおもう。

**天皇政治と民主政治に
まつわる迷信的信仰**

このような色々の点を念頭において、われわれはいまひとたび戦前の天皇政治と今日の民主主義政治との相違を考えてみる必要はないであろうか。戦前の政治においては、天皇の御名において事をはこべば、大体のことはそのまま通っていた。今日はデモクラシーの選挙方式を取っていさえすれば、やはり当時と同じように国民は易々諾々とそれに従っている。いわば天皇のかわり

にデモクラシーという一つの迷信的信仰が入れかわっただけでは、果して大きなまちがいといえるであろうか。今日の政治が、旧態にもまして俗化し、低劣化しているのを、私はデモクラシーの所以だとはおもっていない。しかし、戦前の政治の悪さも、同じように決して天皇政治の政治形態に原因があるとは考えない。当時も今も、その時々にあつた天皇政治と民主主義政治が、ともに形の上だけで施行されて、その各々の本質のよさは、少しもかえりみられていないと判断したいからである。日本を敗戦にみちびいたのは、天皇政治の形態に原因があつたところか、三権を天皇の下に分立させていた旧憲法の本義が、実際の政治の上で全く混乱に陥つてしまい、軍人が政治を指導したり、また議会は軍事と政事の峻別を軍部に要求する気概を失つてしまつたりしていたからのことである。天皇政治は、そのよつて立つ三権分立形態を空無にしたところにその瓦解の因があつたのである。それは云うまでもなく、憲法に対する国民の無自覚に帰因したものであつた。

かかる原因をあきらかにせず、ただいたづらに天皇に代えるにデモクラシーの盲信をもつてきただけでは、日本国民はいつまでたつても政治の在り方を自覚することはできないのではないであらうか。

すべてに優先すべ
き自立の精神

それゆえにすでに今日デモクラシーを布いて立つ日本の国であつてみれば、何よりもデモクラシーの本義を明かにすることから再出発しなければならぬであらう。それは

幾百万言を費してデモクラシーを呼号することをやめて、人間性に立脚した物の見方をすべてに徹底させてゆくことによらなくてはなるまい。現代の日本の姿を輝かしい発展に導くための問題も、要は人々が、人の心の在り方、人の心の統一を求めながら、真の自由を指向することから再出発する必要があるのではなからうか。

抽象的観念的に自由を求めるよりも個人や国家が自らの意志で自由を確立することの方がすべてに優先する問題である。それ故政治形態とか制度とかは、あくまでその生き方、すみ方のための方便であつて、部分的な意義しかもたないものである。これを補うものとしての、人の心の努力、意志、情意相互信頼などが、のびやかに生長しなくてはならないであらう。明日の日本の平和と人類の幸福、明後日の世界を念ずる人々、それは国を愛し国の生長を祈り、国の自由を心から祈る人々である。その人々こそ、人の心を信じ、その信の中に、底深い人類愛の本旨を生みいだす人々ではなからうか。』

両講師の叫びにも似たきびしい語調は、夜のしじまを破って、森に木魂するかと思われた。講師と参加者は一体となつて講義の内容に傾倒した。参加した友らのきびしい二日間の精神的苦闘は、この講義の中に集約されたといったらいいであらうか。さらばといつて講義をききながら問題がすべことけた訳ではない。むしろ新しい問題は次々と内心に生起されてくる。そして講師の

一言一言は真理をついている。現代の複雑にして混沌の度の深さは、我々をして勇躍せずにはおれない気持にさそったのである。

以上で講義はすべて終わった。参加者の心境はわずか一日半で、異常なばかりに高調した。その盛りあがりには加速度的といったらいいであろうか。参加した友らの内心におこりつつある稀有の人生的感動を、いかに整理し、明日からの生活の力源にするか。これが合宿最終日に残された課題であった。この課題を参加した友らにどのように実現してゆくか。我々会員の間で論議はおそくまで交された。現在の高調した思いを統一する方法は、現在の心境をそのまま表現する「創作体験」によるよりほかない。この精神の修練こそが合宿の体験を内心に刻印する最も端的な方法である。会員の意見は期せずしてここに落ちついたのである。

八月二十六日（月）晴

合宿第三日　新しい前進のために

|| 内なる意志を統べるもの ||

緊張と昂奮のあとに來るすがすがしい朝である。我々の間には皆んな一つにとけあつた解脱感がただよっている。この一体感の中に南波講師は登壇、「分裂を統一に導くもの」と題して、やさしい中にも壮重な語調をたたえて次のようにのべた。

『私達は二日を過して、各人各様に色々な体験をされたことと思います。この合宿が、国民生活の分裂を統一するものに連つてゐることを信じて行われたと申しましたが、実際には皆様の心は二日を経てみて、返つて分裂の度を増したのではないのでしょうか。』

或人は今迄の考え方がゆさぶられて、心は動揺しておられることでしょう。或人はもやもやしたもののが心に内攻してゐるのではないのでしょうか。又或人は何かはげしく心に燃えるものを感じておられることでしょう。

このような心の状態をそのままに放置すると、日がたてば自然としぼんでしまいか。又内攻すれば、現実生活にはかえって悪影響をさえ及ぼしかねません。切角の貴重な体験もそのままになってしまいます。このような感情を現実生活の中に生かしめるには、一体どうすればいいのか。「よしやろう」という空元気丈では、激しい現実生活の中にあつては、何の役にも立ちません。

このような燃え上る感情を統一して、内心にすべおさめること—そうすることによってのみ、人生を切り開いてゆく内なる意志が私達の心の中に、生れてくるのであります。こういう内なる意志こそが、力となって現実生活を動かしてゆくのであります。そこに人生開展の姿があります。

この激しく燃え上る感情を統一するものとして、古来日本人は、自然に受継ぎ、伝え継いで来たものを持っております。『しきしまの道』即ち和歌です。五、七、五、七、七の短い言葉のリズムの中に日本人は己れの感情を統一して参つたのであります。

皆様はこの合宿に於て色々体験されたことが、一つの感情となつて、今湧いてくることと思ひます。その思ひを一つ和歌に表現して見ようではありませんか。私達は歌人ではないのです。元来歌をつくる専門の人というのはおかしいのです。日本人が受継いできた『しきしまの道』とは、日本人の日常生活のあわいに湧いた思ひを、そのままに歌い上げてきたものにすぎません。

歌をよむ態度は、一首一文一氣に読み上げるといふことです。さかしらなる観念をさしはさまないで「思うことを一氣に」歌い上げればいいのです。

おもふこと思ふがまゝにいひてみんな歌のしらべになりもならずも

こういう態度であります。』

南波講師の話が終つて講師、会員、一般参加者、全員に用紙が配られた。一時お互に顔を見あわし、会場は暫くざわめいていたが、やがてしんとした静寂の中に入つていった。

いざ、思想を統一しようとするれば思いは色々に派生する。それらを心の「まほろば」に集中せしめなくてはならない。その苦しい心の緊張感を通して言葉は不可測にあふれでる。デルタイはものの認識を「体験・表現・理解」という段階的な言い方で説明したが、これは経験的には同時的現象として起るのである。即ちデルタイによれば自分自身の中からあふれでる表現の体験を通じて、はじめて理解は自分のものになるのである。

しんとした中に、或人はじつと部屋の一隅をみつめ、或人は瞑然し、或人は身じろぎもせず用紙の上に眼を落していた。三十分は経過し、用紙は南波講師の下に集められた。

会場は暫く静寂がつづいていたが、やがて軽やかな会話が生れ笑いが生れてきた。歌をつくるということとは、一度び思いを底に沈め、それが言葉となって心から出離すると次の瞬間、軽やかに心を未来に開かしめるものであろうか。

少憩の後、感想発表に移った。我々は意外にも、この短期間に各々の胸に「一言、この森に告げないでは去れない」という思いが醸成されていたことを知らされた。ここに、数人の言葉をとり上げさして戴くと

「私の内には国を愛するという心はある。しかし、どう愛していいか分らなかったが、この合宿は私に国を愛するとはどういうことかということを示してくれた。来てよかった」

「私は始めから、この会の異分子を以って自任していた。しかし、この合宿に流れる雑念をさしはさまぬ国を思う情に唯心がうたれた。今後私がどうするかは、まだ分らない。」

「この会は小さく見えても、我々日本民族の道標となつて、輝くにちがいない。私は、帰って私の囲りの人に伝えたい。」

「六十の今日迄生きていてよかった。この思いをこの森に鎮まる英霊につげたい。若い人に負けずこれからの残り少ない生涯を捧げたい。」

「私は昨日生れて始めて、又生涯忘れえぬ体験をしました。南波先生の講義に出てきた須佐之男命すさのらのみことが、永遠に去ってもう再び会えぬ母を恋ひ歎き悲しむ歌

〃青山を枯山なす泣き枯らし

海河を悉に泣き乾しき〃

この歌に耳を傾けていた時、ふっと父の面影が浮び、何かしれないものが波うって胸に迫って来ました。私は皆様と同列して物言う資格のない不孝者でした。思いをふり切って涙の出るのをやっとな押しとめました。夜皆ねしずまって後一人ねむれず、様々の思いが胸に迫りました。

今日これからこの森を去ってゆくに当って、私はいつの日にか必ずや又たゞ一人この森にやってきて、心ゆくまであの山肌に泣き伏す日があるのではないかという気がしてならないのです。」

「私は女子高校生です。講義内容はよく分らぬ点もありました。しかし大人の真剣な姿がなんとキレイなことかと思ひ、皆んなの人がこのようにこの世を真剣に考えていたら、世の中は、どんなによくなることだろう

と思っているものです。」

「私は、敗戦以来今日まで、祖国の前途に殆んど絶望感を抱いていたが、この会に参加して、ある曙光を見出した。その嬉しさで一杯なのです。」

一人一人の友らの告白は真剣そのものであった。会場はある緊張感につつまれてきた。うつむいて顔をおおっている人もあった。人間のもつ赤裸々な魂が今まさまさと各人の内心に画きだされている。それは魂の中心的な体験といったらいいであろうか。そしてその体験は祖国への愛情の昇華であり、祖国への全一的な感情の発酵であった。

ソクラテスは「祖国とは母よりも父よりも、又その他総ての祖先よりもつと貴く、もつと崇く、又もつと神聖であつて、神々や理性ある人々によって更に尊重されるものである」といつているが、ソクラテスの生涯を貫いたものはこの祖国への忠誠であった。彼はその祖国に裏切られつとも尚「祖国が忍従を命ずるものは、それが殴打であれ、又負傷若くは戦死の虞ある戦場に我らを送ることであれ、黙してこれに従わねばならない。これは当然なされるべきことであり、正義の要求する所である」(ソクラテスの弁明より)といつて、「悪法」に従つて毒杯を仰いだのである。

キリストも「イスラエルの迷える羊のほかには我はつかわれず」といって、混沌の時代に祖国イスラエルを発見し、それに殉じた。

それでは我々の祖国とは何か。ソクラテスのいう父母や祖先よりもっと貴くもっと神聖な我らの祖国とは何か。それは地図の上に区劃された人文地理学上の日本でもなければ、日本資本主義というイデオロギー化した対象でもない。いわんや「日本人民共和国」という、革命的手段によって作られるであろう未来像でもない。

イギリスは最近の国防白書で、イギリスのまもるべきものを *Way of life* という言葉で代表させている。これはイギリスの国民生活を現在にまで支えてきている生活の総体を意味する。これを英語で換言すれば *Historical experience of life* (歴史的経験) 或は *Natural order of life* (自然的秩序) ということにもなるか。イギリス人のとらえた祖国感情は、このような歴史経験を背景にもつ生活様式そのものである。これはイデオロギーではなくて、生々しい人間の実感から生れた言葉である。我々はこの合宿を通して人間の生々しい赤裸の感情にふれた。日本の姿を最もナイーブな実感に於て内心にとらえることができた。今我々の魂にひびきつつある「

日本」ということばのもつ全一的内容―それこそが我々の魂の故郷祖国の実態である。それを英国流に分析すれば日本を現在にまできづいてきた歴史的伝統そのものである。それは精神史の系譜であり、生活上の経験的内容であり、自然なる社会秩序そのものである。歴史の悲劇は正しい史観を混迷に追いつまむ場合が多いが、そのような時代にあつて、この森でいささかでもそれにふれ得たことは、この上ないよろこびであつた。このようなよろこびの交錯するうちに、会場は閉会式場にきりかえられた。

閉会式に先だつて南波氏は

『先程、皆様のおつくりになつた歌を拝見させて戴きまして、思ったことを一寸申し述べさせて戴きます。歌を一度もつくつたことがないという人が多かつたのですが、チャンと五、七、五、七、七の調べにのつて皆様夫々の思いが述べられております。秀作といふものもあります。皆様の五体の中には、我々の祖先が受継ぎ、伝え継いできた伝統が、生きておるではありませんか。この三日間、よく伝統という言葉が用いられましたが、伝統とは本来こういうもので、頭の中でむつかしく考えられたものではありません。

もう何分かすれば、お互に離れ離れに別れて行きますが、我々の先祖がその境涯をこの調べに述べてきたよ

うに、私達も、折にふれて各々の多難な境涯をそのままに歌って行こうではありませんか。

そこに、たたえられてゆくであろう国民同胞としての、心から心に通う悲しくも又楽しい思いは必ずや祖国を内より守る力となるではありませんよう。』

とのべた。つづいて小田村氏が登壇

『先程一人のお嬢さんが真剣な面持ちで、私達のつどいをととても美しいと感想をもらされた。その語感芸術作品にふれたような感動の言葉ともうけとれる。私達の合宿が、祖国を愛する道を互に発見する真剣なつどいであるだけに、この合宿は友情交流の芸術的表現であったのかも知れません。私達の祖国への悲願は、今このような感動の姿に於て、一少女の方の胸の中にもつたわってゆきます。それは皆様が現にこらんなった通りであります。』

そして更にそのお嬢さんは「やがて母となった日に、この感激を子供にもつたえたい」といわれた。その感激はまた我々大人の感激でもあります。祖国の伝統につながるたえざる生命の流れが、このようにして相続されてゆくではありませんか。こゝに不思議な日本の生命の泉をみない訳にはゆきません。思えば私達は戦後十年間、祖国を失った迷える羊であったといえるのではありませんまいか。しかしながら我々が集って、このような問題を真剣に追求すれば、祖国愛の感情はかくも自然に芽生えてゆくのです。この合宿の成果は知

識をきり売りすることの中にはなくて、祖国の命をこのように皆様方一人一人の魂の中に芽生えさせた所にあるというべきでありましょう。』

最後に名越氏が閉会挨拶にたった。

『二泊三日の日程は夢のようにすぎて、私達はもう別れなければなりません。私達はこの合宿で「ニホンナシヨナリズムの確立」という意味のことをのべてきました。ニホンナシヨナリズムとは何か。それは決して大東亜戦争中の日本に現れた、一国一党による冒険的超国家主義を意味するものではありません。そしてまた現在のアラブ諸国に見られるような、世界的危機の導火線ともなりかねない、感情的ナシヨナリズムを指向するものでもありません。我々の求めるナシヨナリズム、それは伝統的秩序の中に、着実なる進歩を指向するコンサーヴァティズムであります。それは国民的規模に於てひとしく共感できる、民族的共同精神の醸成からもたらされるものであります。デモクラシーもこの共同精神を基盤としてのみ、稔り多い発展をもたらすのであります。そしてそれを培う基盤は、諸講師がくりかえしふれたように、国民的文化伝統、別して「共に是凡夫」という国民的教化の偉業と、外来文化摂取に卓抜な文化精神を発揮せられた、太子の創業に求めるよりほかないのであります。それが混沌たる国内の思想的動向と、きびしい国際勢力の中に処さんとする我々「国文研」の中心的立場なのであります。そして申すもおこがましいことながら、このような国民的事業はお上品な伝達

講習のような形式によってなされるものではありません。きびしい国家的危機の自覚の中に、真乎の文化精神が芽生えたことは、太子の時代や鎌倉時代や、明治時代をあげるまでもなく理解し得るところであります。

フランスのアンドレマルロは「我々の第一目的はフランスの危機を自覚するところにある。そのためにフランス人をしてフランス人としての使命、西欧人としての使命の偉大さを意識させることである。フランスとその歴史、その文化的伝統の自覚を確立しないで、どうしてモスコウやワシントンを相手に話ができるか」という意味のことを述べております。現代の日本はフランス以上の危機をはらんでいるといえましょう。いつまでも共通のシチュエーションを発見し得ない民族の流転は続きます。それはそのまま将来の日本の内部崩壊につながるとしか考えられません。その内部崩壊は悪質なる革命的行動の台頭によって決定づけられるのであります。しかもそれが国際的背景のもとに醸成されつつあるところに現代の危機の複雑性があります。

しかしながら国民が、この危機を自覚し不退転の決意をもってこれを打開しようとするればそれはできることであります。そしてこの危機こそが日本を正しく復活させる一大転機でもあります。しかしながらこの危機を自覚せず、そしてこの危機を自覚しても怯懦に陥り、或はエゴイズムのトリコになって、それを実現しないならば、まだ見ぬ我々の子孫達の物笑いの種となるだけでありましょう。ダンテは神曲に、道德的危機にのそん

で傍觀主義をとる人には、地獄が用意されていることを諷刺しております。私達はこれからの生活を、日和見主義という背信のトリコになって地獄に呻喘するか、正論を訴えて日々の解脱者となるか、歴史は「実践」という姿において解答を迫っております。

私は今実践ということばを使いましたが、私達の実践の内容はスローガンをかかげ、具体的行動を指示するようなものではありません。又各地に会員をつのり、支部をつくり、人員の多きを誇る様な事も考えてはおりません。

これから分れてもどうかこの合宿で得られた歴史的使命感、民族的痛感、それをそのまま語りつたえて戴きたいのです。そしてお互に文通なり、時に会うなりして、私達は日本国民生活の「地の塩」となってゆきたいと思うのです。それが我々の実践の内容であります。現在の日本人の魂の中に低迷する雑多な妄執をときはなせば、民族の清朗な魂は脈動していることは、この合宿で証明せられたところであります。』

ここに、岡山合宿の全日程は終了した。

全員起立。石坂豊明氏の先唱で「君が代」が斉唱された。

君が代は千代に八千代に　さざれ石のいはをとなりて　こけのむすまで

敗戦以来このかた、このような思いで、国歌を唱ったことがあったであろうか。ここ護国神社の森内で今君が代は齋唱されている

「祖国の永遠をこい願う」て散って行ったであろう我々同胞の執念は、いついつまでもこの調べに託されて人々の胸につたえつがれて行くであろう。

この調べには我々民族の無量の思いがこめられているというのか、私達は不可惻なる感動の中に、心ひかれつつこの森を去って行った。

忙しい生活の中に貴重な時間をさき、この森に集ってこられた参加者皆様の御健康を心からお祈りすると共に、又いつの日か邂逅の時あらんことを期待しつつ、この報告を終る次第である。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

合宿感想集

執筆者

山本寛
山本U
安田祐治
安田実子
杉本幸二
水田治

人間再生の道

会社員 山本 寛

私は現実社会に、色々の不満を抱いて生きてきた。そしてこれは結局、政治の貧困の故であると一途に思いこんできた。政府を呪詛する人々―革新系政治家、学者、知識人―の言葉にだけ親しみを感じ、いささかでも、彼等を攻撃する人々には嫌悪と増悪を抱いてきたのである。現在、日本を救いうるものは社会主義の実現にないと信じてきた。別に確固とした、理論的裏付のある信念ではなかった。唯、明日の幸を約束するものは社会主義だと、理屈抜きに信じて来たのだ。唯、左翼の人々の言葉に、胸のすく様な快感と信頼と魅力を感じてきたのだ。これが偽らぬ合宿参加前の私であった。

国民文化研究会は、混迷した日本の再興原理を求め

るとか、大きく歌っているが、社会主義革命以外に日本救済の道なきものと信じていた私には、右翼の臭いのするこの会に、内心不真面目な態度で参加した。

会に参加して、始めは嘲笑していた私も、結論として、三日間に恐しい迄に、私の心の変ったことに気付いたのだ。閉会時の国歌斉唱に於て、私は、生れて始めての感慨にひたつた。始めて何か故里にかえるに似たわななきを覚えた。涙があふれ出ようとした。私は日本人だったのだ。始めて日本人としての自分を意識した。

合宿中、諸講師の態度に、はげしい祖国愛を感じない訳にはゆかなかつた。現代日本に欠けているものは、要は、雑念をさしはさまぬ一途の祖国愛以外にあるまい。日本人であり乍ら、祖先の残した、輝しい文化遺産を罵倒し、嫌悪する態度。日本人たるの誇りも自信も喪失してしまっているという以外、いい様な

い有様。

米国心酔盲者、ロシヤ一辺倒の人々。そして之等の入々が支配している日本。ここに日本の無秩序の原因がある。このままでは亡国の民と化し去るほかあるまい。

我々は、政治がどうの、資本主義がどうの、社会主義がどうのという前に、大切なものを置き忘れていたのではあるまいか。政治以前の、人間そのものへの開眼なくして、何で人間再生の道があるうか。人間の再生のない所に何で、祖国の再生がありえようか。

私は、この合宿に参加して、いささかでも、それにふれえたことを最上の幸せと思っている。



愛情の発見

U 子

合宿に参加するまで私の胸は小鳩のようにふるえていました。わずか十六才の少女の私が、大人の中にまじって同じように話しあえるかどうか、不安でならなかったのです。しかし最初に護国神社の壮厳な緑にふれた時、何だか心が息づく様な気持ちになりました。高くそびえる忠霊塔、掃き清められた広大な敷地、そういう雰囲気によつと心を支えながら開会に臨んだのでした。

最初に挨拶をのべられたN先生の情熱あふれるお言葉は、今迄聞いたこともない迫力でした。それに続く諸先生の講義は私の心に深くくい入りました。それらは皆同じ一点からあふれ出ているようでした。その講義に集注される真剣な質問。政治、経済、文化にわた

つて現在の日本を憂える真剣な魂のふれあい。これらは現在の高校生活などでは夢想だもできない世界でした。

感激に頬を燃しながら激しい論争をたたかわされたあのお兄さんの顔、あのおじさんの瞳。大人の人達が示して下さったこの美しい姿は私の大きな驚きでした。私はその真剣さにうたれて、合宿中何度か心つぶやきました。「中国、近畿に於いて、いや日本全体に、真にこうしてまなこを見開らこうとする人が何人いるだろうか」と。

そう思いながらも未熟な私には講義の内容も討論された理論も、知識としてとり入れる事は殆んどできなかったのです。唯、心の底からコンコンとわき出て来る感動の泉だけが今も残っているのです。これが南波先生の言われた「国民的伝統への回帰」というものでしょう。日本への愛情だけが沸々として湧いて来る

のです。私はこの合宿によって「祖国への愛情」を発見したのです。

私はこの欲びを「成績向上と就職」だけに過している級友にもわかちたいと思うし、また何時か母となつた日に子供にも伝えねばならぬと思います。

その為に今後とも諸先生に指導をお願いしたいのです。その上に願いがありませんなら、国民文化研究会の機関誌を作ってくださいたいのです。それだけが合宿の成果を確保する方法だと思ふのは私だけでしょうか。

敬虔なる情熱

会社員 安田祐治

今までの私は、自己の主張を他人に説く人の傲慢な強圧的態度に対して、生理的な嫌悪を感じていた。こ

の嫌悪のために、人々の言葉を虚心に聞く事が出来ず、彼等の情熱を打算によるハツタリであると考え、その理論は打算的に考え出された目的の達成の為に作り上げられた手段と見なしていた。不安と焦心の中にも頽廢的生活を正当化しようと試みた。この考えは、この合宿に参加する迄ぬぐい去る事が出来ず、不安な気持ちで参加したのだけでも、起居を共にし、膝を交えて個人の人格に接するうちに、この世の中には謙虚で打算のともなわない情熱のあることを知った。これまで自分の持つて居た偏見こそ自己の傲慢に起因していることに気が付いた。傲慢の殻からはい出して、今更ながら自らの無知を痛切に感ずる。国家意識も階級意識も持たず、これ等に関する論争などどこ吹く風と聞き流していたような私には、講義をそのまま自分のものにする事は出来ないにしても、思考の道標として銘記すべきものがあつた。

なお、座談の時間が短かすぎて、個々の問題についての疑問、不明な点等が多く残つたのは残念だけれども、この集いとその場限りのものとせず、今後の話合の基地とすればこの会の意義は更に増すものと思う。

日本歴史の流れを求めて

水田実治

国民文化研究会の「趣旨」は何時の頃からか、私の心の奥に育まれていた。それは誰に教えられるともなく、自然に芽生えた私の心情であつた。だから昨年私の学校で川井先生の講演を聞いた時、大いに共鳴した。しかし理論の乏しい私は、ジャーナリズムの影響からも脱出しにくく、結局は定見のないままに合宿に参加したのだった。そういう動揺期にあつた自分に、敵と聳える一本の柱を与えてくれたのは、今度の合宿で

あった。

この合宿は素晴らしい日本歴史の流れを教えてください。古事記や万葉は私達の祖先がこの国土で実際にうたった民族の歌声であった。その他聖徳太子、親鸞等に代表せられる日本の伝統を掘り起せば世界に誇る文化的遺産は宝庫の如くちりばめられているのだ。

特に合宿後私の心をとらえているものは明治天皇に代表せられるその時代の「流れ」であった。これは「明治天皇と日露大戦争」という映画を見て余計にその感を深くした。たしかにこの映画は批評家のいうように稚拙で泥くさい所は多分にある。併しそこには統一された民族のリーダーシップがうたわれていた。国民の殆んどが一つ心になって明治天皇の高い指導精神に身を捧げた。この民族的な一体感は私にとって何ものにも優る感激であった。これは日本独特の雰囲気であると思った。私達の祖先はこのような美しい世界を築いたのだと思えば、こみあげて来る感激をおしとどめ

る事はできなかった。日露戦争にしても大東亜戦争にしてもこのように尽忠の精神を燃やしながら戦死した人達は無数にいるのだ。更には敗戦後自刃して祖国の生命に殉じた人々も数えきれない程おるとか聞く。このように「名もなき多くの人々」が尊い命をつみ重ねて、日本の礎をまもってきたのだ。私達はこのような人々の死を無駄にしてはならない。日本の歴史とはこのような悲願をうけつぎまもってゆく大きな生命の流れなのだ。一日本人としてこの生命の流れを未来に受け継がねばならない。そういう日本人としての使命を私はこの合宿から得たのだ。

今まで私は日本歴史に対する感激はおろか、日本民族としての誇りについて誰からも聞いたことはなかった。それどころか「日本は大陸に進出して他国を侵略していった。そして他国の犠牲の上に日本は発展した。」という意味のことばかりを耳にしてきた。果してそのようにだけいえるものであろうか。ソ連は不可

侵条約を破つて、火事場泥坊をしたのではなかつたか。イギリスにしてもフランスにしても今日を作りあげている力は他国の侵略ではなかつたか。日本の過去を否定する迫力をもって、これ等の国を否定できるかどうか。また一般にこのようにも言われている。「日本人はだまされて戦争に駆り出された。戦死者は皆んな戦争を呪つて死んでいった。」と。この護国神社に祭られた五万の英霊はだまされて死んでいったのだろうか。英霊はそろつてかつての日本を呪っているのだろうか。当時の心境を思わず、現在の個人感情で戦死者の心を壟断する態度に賛成することは出来ない。このような一方的に過去を否定してしまふ態度は日本の歴史の正統な流れを断絶させるものではあるまいか。

勿論過去の日本には批判せられるべき多くの事がある。特に大東亜戦争の指導は今から考えてみて幼稚極るものであつた。だからこの事は日本民族として敬虔に反省しなければならぬ。反省の上に立つて日本

の発展を期さねばならない。英霊も地下でそう願つているのではあるまいか。そして日本人は殆んど全部終戦時このように誓つていたのであるまいか。それを何時の頃からか過去の全面的否定に移つていったのだ。「祖国喪失」という言葉がそっくりそのまま今日の日本にあてはまるのではないか。日本の未来を背負うはずの青年の殆んどは意識して過去の日本を呪う「異邦人」か。自己の出世を夢見るエゴイストか。享樂を追う放心患者になつてしまつた。今や歴史の生命は死滅せんとしている。

ひるがえつて世界の大勢をながめれば、米ソ英独インド中共等は夫々独自の国ぶりを發揮しながら、世界の舞台に登場しつつある。日本だけが何時までもこの空虚に酔つておれるであらうか。合宿の教訓は無限の広がりをもって私を叱咤して来る。噫！

在ソ十一年の決算

第十一次引揚者 杉本 幸二

シベリヤ抑留十一年、それは飢餓と過労と洗脳教育の波状攻勢に追いたてられながら、重荷を背負うて果て知れぬ凍土をさまよいゆく姿にたとえたらいいであろうか。しかもその凍土の上には餓狼の群が眼をランランと輝かしながら私達の言動を監視していたのだ。片手にパン、片手に鞭をもった親狼、その手先となって忠誠を誓う子狼らの監視のもとに、総てのグループ活動は分断せられ、一切の自由は剥奪された。そこに新しく誕生したものは狼群率いるポリシエヴィキ的革命軍であった。この革命軍は何時の場合にも反動との斗争を第一の斗争目標として掲げた。マルクス、レーニン主義の理論武装、社会主義生産競争等徹底した政治教育を貫くものは「内部摘発の為の相互批判」と言う

吊しあげであった。ソヴェットのメカニズムは人間を檻の中に入れて友喰をけしかけることであった。同胞を吊しあげなければ自分が吊しあげられる。自分を守る為には機先を制して相手を吊しあげるよりほかない。狼共は日本人全部に狼となる事を強制したのだ。かくして革命軍隊としての鉄の規律は確立されたが、同胞相喰む「斗争に次ぐ斗争」は友喰い競争となり、その毒牙によって戦犯となり、不具となり、或は栄養失調から不治の病となり、或は怨みを呑みながら遂に「白樺の肥」にされた。其の犠牲者数知れず——生命の恐怖に戦慄しながら長い長い暗黒の曠野を唇をかんで歩み続けた十一年の歲月——思えば永い風雪の十一年であった。よくそここまで耐え得られたものと、われながら限らない感慨をもってふりかえるのである。思えば私を今日まで耐えさせた力は何であったか。それは遠く離れて知る母国への愛情であった。私を支えている一切のものを失った時、哀々として私の胸に

甦ってくるものは果しなき祖国への執念であつた。やがて私にとって祖国は信仰に似た対象となつた。孤独の心に燃やし続けた祖国へのイメージと、祖国の前途に迫るきびしい憂慮と、身を以て祖国の防壁となる献身の決意とを心に抱いて、やつとの思いで迎り着いたわが祖国であつた。

「山河の美しさ」「物資の豊かさ」「自由の満喫」等、外見の素晴らしさは一時私の眼を奪うものがあつた。併し時日の経過とともに此の祖国には私の期待を満して呉れるものは何もない事を次第に気付かせてきた。その内実は魂の抜けた空虚な形骸と言うよりほかないのだ。

蔽しい国際情勢の渦巻からあまりにも隔絶された安んずる祖国、平和とか民主的とか愛国心とか自主性とかお題目を百万遍唱えながら、何等内実の伴わない精神の下痢症状、青年を支配して居る利那的享楽主義、果ては祖国日本を平気で呪う無責任な放言、米、英、

仏、印、中、ソと果しなき他国への媚態追従、寧日なき政党間とその内部での泥試合、無制限な階級的エゴイズムの横行——それらは祖国を忘れた人心零落の姿というよりほかはない。この落魄の姿こそは、拙劣極る戦争を勃発させ、それを敗戦にまで導いた根深い民族墮落の標本であり、敗戦後も尚虚脱状態を続ける日本民族そのものの根底に横わる「万悪の禍根」なのだ。

私に課せられた此の重責を思うて行き暮れていたとき、廻りあつたのが「国交研」の合宿であつた。私は都合で一日しか参加できなかったけれど、合宿は砂漠の中で発見したオアシスであつた。ここで語られた班別討論や講演のすべてにはふれられなかつた。しかしその集いの中には「不請の友」となりあう謙虚な同胞愛が溢れていた。そこには「シベリヤ民主運動」を支えた吊しあげに依る鉄の規律とは似ても似つかぬ豊かな統一感があつた。そこには祖国再興の方途を戦前戦

後にわたる禍根芟除の中に求めんとする雄大なる識見と実践の歩みとがあった。「日本未だ亡びず」と私の心に快哉を叫ばせた歎びは何物にも代え難い収獲であった。シベリヤ漂泊の旅でえた「祖国のモデル」が、そのままの姿となつて合宿の中に再現されていたのだ。私にとって在ソ十一年の行きつく所、それは現代の日本国民生活の中に「祖国のモデル」を開発する事しかない。それは日本歴史の成果に対する公正なる審判とともになされるべき偉大なる事業である。苦難の道とはいえこのことよつてのみ、日本を盤石の安きに置くことができるであらう。それは身命を抛つてなされねばならぬ我々の責務である。私はこの使命に戦きながら新しい前進を誓うのだ。

二つの墓標

今日の「国文研」の先達となった故人は枚挙にいとまはない。戦中戦後を通じて、特攻隊に或は南方に或は自決に、短い生涯を捧げて悠久の生命に殉じた師友らの数は無慮数十にのぼるであろうか。幾多在天の諸友らも岡山合宿に参加していたことは我々の確信である。この合宿記録に詩と共に紹介した二人の師友は、あの激動の時代に国内の思想戦線にあって「文化の戦士」として挺身。きびしい研究活動と創作体験は自らの肉体を消費して、国家の運命と共に昇天した。それは文の道に生きて護国の鬼となった稀有のケースである。

田所広泰 一高在学中黒上氏に師事、東大卒業後学生

運動に志す。支那事変大東亜戦争とつづく国歩艱難の時代に、思想戦の意義を宣明すべく精神科学研究所を創設。高い政治的識見に基く国策批判は国家の行手を照す道標であった。しかしながら幾度か検挙の悲運に遭遇して病を得、昭和二十一年病歿。行年三十七才。国文研の学究的実践的先駆者。

首藤雅也 宮崎高農在学中より田所氏に師事。天稟の詩魂は多くの劇詩創作を生む。中でも交響詩「人生の悲劇」は不滅の価値を持つ。昭和二十三年病歿、行年二十五才。国文研が九州の地から起ったのも、首藤雅也という「一粒の麦」に負う所が大きい。

岡山合宿を運営した講師並びに会員紹介

(五十音順)

氏名	職業、勤務先	現住所	出身校
青砥宏一	旅館経営(こんや旅館)	島根県玉造	徳島高工
石坂豊明	姫路西高校	姫路市	東大法学部
岩崎太朗	吹田豊津中学校	大阪市	立大文学部
石村暢五郎	高崎経済大学	東京都	神戸大学
小田村寅二郎	すみだ製作所経営東京国民文化研究会世話人	〃	東大法学部
川井修治	鹿児島大学	鹿児島市	東大文学部
木下彪	岡山大学	岡山市	
妹尾大之祐	県農協中央会	井原市	
高木尚一	労働科学研究所	東京都	東大文学部
千野政長	上野高校	東京都	東大文学部
富岡栄八郎	玉野商業高校	児島市	九大法学部
名越二荒之助	笠岡商工高校	小田郡北川村	山口高商
南波恕一	千葉第一高校	千葉市	東大文学部
浜田収二郎	共同通信社	東京都	東大経済学部

昭和三十三年七月一日印刷
昭和三十三年七月十日発行

東京都港区赤坂青山南町四の二一

発行所 国民文化研究会事務所

小田村寅二郎

(頒価 百円)



